『ヴァジュラーヴァリー』「墨打ちの儀軌」和訳（下）

森　　雅秀

凡　例

①　以下に示したのはAbhayākaragupta, *Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā* の第12儀軌「墨打ちの儀軌」(sūtraṇavidhi) の後半部の翻訳である。前半は森（2004）として発表されている。

②　和訳は現存する11種のサンスクリット写本にもとづいて筆者が校訂したテキスト（未刊）によった。サンスクリット写本については森（1991: 57-59）を参照されたい。このうち、影印版が刊行されているLokesh Chandra（1977）では、該当個所はff. 75-99に含まれる。

③　和訳に際してはチベット訳テキストも参照した。チベット訳は北京版、デルゲ版、ナルタン版の3種の版本を用いた。北京版の該当個所は以下の通り。TTP, Vol. 80, 94.1.5-98.3.2.

④　内容の理解をはかるため（　）内に説明の語句、原語などを入れた。内容に応じて段落をわけ、適切と思われる見出しを訳者が付けた。ただし、全体の見出しである「墨打ちの儀軌」は著者自身が示した用語である。翻訳上補った語句は［　］内に入れた。

⑤　ツォンカパの『真言道次第』(NRC) には、VAの内容に応じて関連する文献が多数紹介されている。訳注ではこれらを可能な限り示した。その場合、NRCの該当個所を［NRC 115. 5］のような形で示すが、これは北京版のp. 115, f. 5を表す。また、VAの対応する箇所が広範囲にわたる場合、その始まりと終わりの語句を太字にし、括弧に入れて示す。

⑥　訳注の中でVAの特定の箇所を指示する場合、＜12.5.1.1＞のように、本稿で用いる分段でそれを示す。

12.5　各マンダラの墨打ち法

12.5.1　文殊金剛マンダラ

＜12.5.1.1＞

さて、［マンダラの］内部の［線に関する］相違点が説明される。

根本線（mūlasūtra）（図1-①）の内側に門の大きさ（＝4マートラ[1]）だけ、尊

格の帯(devatāpaṭṭikā)(図1-②)のために取り、1本の線(図1-③)を[根本線に対して]水平に、2本の対角線(koṇasūtra)(図1-④)に至るまで[引く]。その内側に色金剛女(Rūpavajrā)などを置くために門の大きさ(=4マートラ)を取り、梵線の臍(brahmanābhi)(=マンダラの中心)にある糸を、梵線の上か、あるいは北東の[対角]線の上で保ち、中心のマンダラ(garbhamaṇḍala)の境界(sīmā)にあたる第1の円(図1-⑤)を[引く][2]。その内側に金剛杵輪(vajrāvalī)として1マートラ取り、同様に第2の円の線(図1-⑥)を引く[3]。そこから円の反対側まで、梵線の右側に2本の線を引く。はじめの線(図1-⑦)は[梵線から]2マートラ離れ、第2の線(図1-⑧)は柱(stambha)と[そこに描かれる]主尊のシンボル(nāyakacihna)のために[4]、さらに1マートラ離れて[引く]。同様に左側にも[引く][5]。この場合、南に立ち、北を向き、東に柱の線を引く。北に立ち、南を向いて西の線を引く。西に立ち、東を向いて北の線を引く。東に立ち、西を向いて南の線を引く[6]。

『ヴァジュラダーカ[タントラ]』(Vajraḍākatantra)には「第1の円の外側に光炎輪(marīcimālā)のために1マートラ取り、円(図1-⑨)をひとつ引く」と説かれている[7]。

つぎに梵線と対角線を消すことで9つの内院(koṣṭha)ができる。あるいは、それぞれの梵線と主尊(=五仏)の区画の帯の内側の線は消してしまい、[円の外の]対角線と尊格の帯の線(devatāpaṭṭīsūtra)は残さなければならない。尊格の区画(devatāsthāna)とその色(rajas)とがはっきり区別できるように、彩色することで[顔料で各区画が]覆われなければならない。

<12.5.1.2>

ここで、もしこのように線を引くのとは別の方法で引きたい場合、梵線の外側に2マートラ取り、線を1本引く。その外側に1マートラずつ取り、6本の線を[引く]。7本目の線も[引く]。[7本目は楼閣の内部には無く]楼閣の外廊(kramaśīrṣa)の線までである[8]。ここで述べられた7本の線のみを引き、前のように3周の円を作り、前の手順で線を引いたときに残しておいた線は残しておき、それ以外は消す[9]。

この両者[10]とも、文殊金剛のマンダラの墨打ち(ṭipaṇī)[11]である。別の主尊(nāyaka)をおすえする場合もこのようである[12]。

＜12.5.1.3＞

同書（＝『マンダラ儀軌四百五十』）によって

「四角にして4つの門をそなえ、4つのトーラナで飾られる。4本の線が正しく接した外のマンダラ（bāhyamaṇḍala）の線を引け[13]。その内側には、8つの小マンダラ（maṇḍalaka）のごときチャクラ（cakra）を[14]。外のチャクラの半分の大きさ[15]で、均等に完全なマンダラ（parimaṇḍala）を［描け］。輪（cakra）や柱（stambha）などで飾られた[16]、金剛杵輪（vajrāvalī）による美しい円を［引け］」[17]

と、また

「輪や柱などの線の区画はラジャスの区画に等しい」[18]

と［他のマンダラとの墨打ちの相違が］区別されている。

12.5.2　『ピンディークラマ』所説のマンダラ

『ピンディークラマ』（Piṇḍīkrama）に説かれるマンダラについても、墨打ちの方法はこのようである。違いは、2番目の円の内側に金剛杵輪（vajāvalī）として1マートラ取り、3番目の円（**図2-①**）とすることである[19]。第1の円の内側は火炎輪（raśmimālā）である。第1の円の外側には円はない。ナーガブッディ様（Nāgabuddhipāda）もおっしゃっている。

「根本線の半分の長さ（＝16マートラ）が、中心の輪（garbhacakra）の大きさである」[20]

また同書に

「梵線からヴェーディー（vedī）[21]のマートラ（＝2マートラ）で［第一の線が］ある（**図2-②**）。ヴェーディカー（vedikā）の半分（＝1マートラ）が第2［の線］（**図2-③**）である。第3（**図2-④**）はヴェーディーの1.5倍（＝3マートラ）、さらにヴェーディカーの半分（＝1マートラ）で［円（**図2-⑤**）が］ある[22]。五種の光によって飾られた光輝く金剛杵輪（vajramālā）を作れ（**図2-⑥**）。内部の輪の外に4本の線（**図2-⑦**）を等しく引け。金剛杵が印され、美しく飾られた8本の柱を中心に描け。9つの小部屋（koṣṭha）が金剛の柱の内側にある」[23]

と［説かれる］。

12.5.3 『サンプタタントラ』所説の金剛薩埵マンダラ

『吉祥サンプタタントラ』所説の金剛薩埵マンダラは、根本線の内側に3マートラ取り、幅は0.5マートラの二つの円の間にあるのはチャクラ輪(cakrāvalī)である(**図3-①**)。その内側に3マートラ取り、幅は0.5マートラの二つの円の間にあるのは蓮華輪(padmāvalī)である(**図3-②**)。その内側に3マートラ取り、0.5マートラのところまでが火炎輪(raṣmimālā)である[24](**図3-③**)。その内側に幅が0.5マートラの二つの円の間が金剛杵輪(vajrāvalī)である(**図3-④**)。この内側の円の線から反対側の円の線まで、梵線の右側に2本の線が平行にあり、はじめの線(**図3-⑤**)は[梵線から]1.5マートラのところで、2本目(**図3-⑥**)は主尊のシンボルと柱として0.5マートラ取る。同様に左側にも[引く]。梵線などを消すのは前と同様である[25]。以上が相違点を含む墨打ちの方法である。

12.5.4 ジュニャーナダーキニーマンダラ

ジュニャーナダーキニー・マンダラについて。根本線の内側に4マートラ取り、円を描く(**図4-①**)。つぎに中心の光(garbharoci)[の区画]として1マートラ取り[26]、2周目(**図4-②**)。つぎに金剛杵輪(vajramālā)として1マートラ取り3周目(**図4-③**)。つぎに女尊(devī)[の区画]として6マートラ取り[27]、[梵線と]平行し、円に[先端が]接する線(**図4-④**)を引く。つぎに柱と主尊のシンボルのために1マートラ取り、同様に2本目の線(**図4-⑤**)を引く。これが墨打ちの特別な点である。

12.5.5 ヘーヴァジュラマンダラ

17尊からなる4種のヘーヴァジュラマンダラ[28]。根本線の内側には梵線と対角線のみで、他の直線は引かない。梵線の外には4つの円がある。このうち、はじめの円は花芯(karṇikā)の部分で、2.625マートラのところにある(**図5-①**)。第2の円は花弁(dala)の部分で、5.25マートラのところにある[29](**図5-②**)。その外に0.125マートラ取り、さらに1マートラ取り、第3の円で金剛杵輪(vajrāvalī)の部分である(**図5-③**)。第4は1マートラ取り、中心の光(garbharoci)の部分である(**図5-④**)。

12.5.6　ナイラートミヤーマンダラとクルクッラーマンダラ

ナーラートミヤーマンダラとクルクッラーマンダラ23尊あるいは15尊からなるナイラートミヤーとクルクッラーのマンダラも同様である。

12.5.7　ヴァジュラアムリタマンダラ

4種のヴァジュラアムリタマンダラも同様である。

12.5.8　ヘーヴァジュラマンダラ

9尊からなるヘーヴァジュラの4種の［マンダラ］。梵線の外に花芯のために5マートラ取り、花芯の円がひとつ（図6-①）。その外側に花弁のために10マートラ取り、円がひとつある（図6-②）。これが相違点である。その外側の1マートラは瓶のため、あるいはそこには金剛杵輪があるという説もある（図6-③）。

12.5.9　マハーマーヤーマンダラ

5尊からなる世尊マハーマーヤーの姿をしたもの[30]のマンダラも同様である。

12.5.10　ブッダカパーラマンダラ

9尊からなる世尊ブッダカパーラのマンダラも同様である。

12.5.11　ヴァジュラフーンカーラマンダラ

ヴァジュラフーンカーラマンダラについて。梵線から2.5マートラ離れて花芯の円（図7-①）がある。その外側に花弁のために5マートラ取る（図7-②）。つぎに1マートラ離れて四方と四隅に7.5マートラの8つの蓮華があり（図7-③）、東の蓮華の外に3マートラの蓮華がある（図7-④）。西の蓮華の外も同様である（図7-⑤）。以上が墨打ちの相違点である。

12.5.12 サンヴァラマンダラ

<12.5.12.1>

世尊吉祥サンヴァラのマンダラとヴァジュラヴァーラーヒーのマンダラ。根本線の内側に梵線と対角線のみがある。梵線(図8-①)の外側に2マートラ取り、[両端が]根本線に接する線(図8-②)を1本引く。対角線(図8-③)の左右に2マートラずつ離れて、それぞれ1本ずつ線を[引く]。長さは[マンダラの]中心の両側に門の長さ4つ分(=16マートラ)ずつである。

つぎに梵線と対角線の外側の線のさらに外に2マートラ離れて第1の線(図8-③)を引く。梵線、対角線、そしてこの両側の線の上に、門の長さ(=4マートラ)の線ができる[31]。両側の線と垂直に、[梵線や対角線から]それぞれ2マートラずつあるからである[32]。その外側に、同様に[2マートラずつ離れて]5本の線(図8-④〜⑧)を引く。対角線とこれらの両側の線の上に6本目の線(図8-⑨)を引く[33]。

つぎに梵線の右側の第1の線(図8-③)の1マートラ内側から出て、2本目の線(図8-④)の端に至り、3番目の線(図8-⑤)の端から1マートラ内側に入り込み、4本目の線(図8-⑥)の端に至り、5番目の線(図8-⑦)の端から1マートラ内側に入り、6本目の線(図8-⑧)の端に至り、7本目の線(図8-⑨)の端から1マートラ内側に入る。このように折れ曲がった線(図8-⑩)ができあがる。その[折れ線の]内側に0.5マートラ離れて同じように折れ曲がった2本目の線(図8-⑪)を引く。このように、折れ曲がった2本の線を梵線の左側にも引く。同様に対角線の左右にも引く。

<12.5.12.2>

つぎに[マンダラの]中心で糸を固定し、根本線が最初で、順に内側に門の大きさ(=4マートラ)ずつ取って、梵線上においた糸で4つの円を描く(図9-①〜④)。すなわち

> 根本線からとりかかり、円の線を4つ丸く描く。三つの輪は門の大きさずつが適当である。残りは蓮華の八葉の花弁の長さで、これより余分な部分はいささかもない。心輪(cittacakra)以下[の三つの輪]のまわりには金剛杵と蓮華と「輻をそなえたもの」(arin=輪)の環がある[34]。

この場合、はじめの三つの円(図9-①〜③)のそれぞれの内側には0.5マートラ離れてひとつずつ円がある(図9-⑤〜⑦)。しかし、心輪の中心部のはずれ

(cittacakranābhyanta) を示す第4の線の内側には、0.25マートラ離れて（図 9-⑧)、さらに花弁として2.5マートラ取り、花芯（karṇikā）のために雄しべの輪（keśaravalaya）のかたちをした円（図 9-⑨）がある[35]。

金剛杵輪の輪（vajrāvalialaya）のために、四つ目の円の内側に0.5マートラ離れて円がひとつあるという説がある[36]。輻（ara）の両側には、4つのたいそう恐ろしい（atyugra）金剛杵で取り囲めと他の者は説く[37]。輻の両側に金剛杵、蓮華、法輪の各輪が順にあると言われる。

ここで外の円（図 9-①）の内側は、円と輻の線を残して他の線はすべて消す。[サンヴァラマンダラの] 墨打ちのの相違点である。

12.5.13　ブッダカパーラマンダラ

これは25尊からなるブッダカパーラマンダラについても同様である。相違点は、はじめに述べた第４の円（図 9-④）と雄しべの線（図 9-⑧）を作らないことである[38]。６番目の円の線（図 10-①）の内側には、蓮弁として５マートラ取り、ここに雄しべの姿をした円（図 10-②）があるという[39]。

12.5.14　ヨーガーンバラマンダラ

ヨーガーンバラマンダラについて。根本線の内側に3.5マートラ[40]離れて、幅が１マートラの２本の円（図 11-①②）の中には金剛杵輪がある。そこから3.5マートラ離れて円がある（図 11-③)。それ以外の墨打ちは『ピンディークラマ』所説のマンダラと同じである[41]。根本線の内側に二重の楼閣（kūṭāgaradvaya）を墨打ちすることは、後述の43尊からなる文殊金剛マンダラのようであると、他のものが言う[42]。中心の楼閣（garbhakūṭāgāra）の外に丸い楼閣があるという説もある。そこには楼閣はなく、金剛杵輪（vajrāvalī）が前と同じようにあるという別の説もある[43]。

12.5.15　ヤマーリマンダラ

13尊からなる吉祥ヤマーリのマンダラについて。梵線と対角線だけで、他の線はない。このうち、梵線から門２つ分（８＝マートラ）離れて、対角線まで平行に、

羯磨金剛杵の基台 (viśvavajravedī)[44] の線を1本ずつ引く (図 12-①)。その内側に1マートラ離れて、金剛杵輪の線を1本ずつ引く (図 12-②)。基台の線から [外側に] 門の大きさ (=4マートラ) のところまで5つの鈷がある[45]。その後で梵線と対角線を消せ。以上が墨打ちの相違点である。

12.5.16 金剛ターラーマンダラ

金剛ターラーのマンダラについて。梵線と対角線のみで、梵線の外側に花芯として3マートラ取り、円を一つ引く (図 13-①)。その外側に蓮弁として6マートラ離れて円を一つ引く (図 13-②)。梵線と対角線を消す。

12.5.17 マーリーチーマンダラ

25尊からなるマーリーチーマンダラについて。文殊金剛のマンダラと同じように線を引く[46]。

12.5.18 五守護マンダラ

13尊からなる五守護のマンダラ。梵線と対角線のみで他の線はない。このうち、梵線の外側すべてに4マートラ取り、中心の蓮華となる (図 14-①)。その外側8マートラ[47] のところに、四方に4つの蓮華がある (図 14-②)。梵線と対角線を消す。以上が相違点である。

12.5.19 金剛界マンダラ

53尊からなる金剛界マンダラ。根本線の内側にそれ自体の門 (svadvāra)[48] 二つ分の大きさ (=8マートラ) をとり、二つの対角線の間に [根本線と] 平行に線が1本ずつある (図 15-①)。これが第2の内マンダラ (abhyantaradvitīyamaṇḍala) の根本線で、門 (dvāra)、門扉 (niryūha) などから外廊 (kramaśīrṣa) までの線 (図 15-②) はそなえているが、トーラナなど[49] はない。

この根本線の内側に接して第1の円がある (図 15-③)。その内側に金剛杵輪として1マートラ取り、第2の円がある (図 15-④)。ここから反対側の円周まで、梵線

の右側に２本の線があり、１本目は［梵線から］２マートラのところである（図 15-⑤）。２本目は柱として１マートラ取る（図 15-⑥）。同様に左側にも［引く］。次に梵線と対角線を消すと９つの内院（koṣṭha）ができあがる。他に梵線と主尊（nāyaka）がいる帯の内側にある諸々の線は消す。以上が墨打ちの相違点である。

『真実摂経』（Tattvasaṃgraha）に「中心の楼閣にはトーラナがある」と説かれるのは降三世マンダラについてのみである[50]。

「金剛の柱の先のところは、５つのマンダラによって飾られる[51]」

と説かれているのは、五如来の住居（sthāna）に金剛杵の形の円（vartula-vajrarekhā）[52]を描くということであり（図 15-⑦）、そこに5つの月輪を描けとアーナンダガルバ（Ānandagarbha）が説明しているのは正しくない[53]。金剛杵の形の円を説くこの語句（vācaka）は、経典に説かれている言葉（tantravākya）ではないからである[54]。

12.5.20　文殊金剛マンダラ

43尊からなる文殊金剛マンダラ。根本線の内側に門二つ分（＝８マートラ）離れて両対角線に接するまで平行に線を1本ずつ引く（図 16-①）。これが第２の内マンダラの根本線で、門、門扉から外廊（図 16-②）までの線を含むが、トーラナなどはない。この中にそれ自身の門二つ分（＝4マートラ）取り[55]、対角線に接するまで平行に線を1本ずつ引く（図 16-③）。これが第3の内マンダラの根本線で、門、門扉など[56]はそなえているが、トーラナなどはない。「この根本線の内側に接して第１の［円である］」などと説明した金剛界の内マンダラのように第３のマンダラがある[57]。以上が墨打ちの相違点である。

12.5.21　法界語自在マンダラ

法界語自在マンダラ。マンダラ一般の共通の、外のマンダラの線を引く方法についてすでに説明した儀軌を理解しなければいけないが、根本線（図 17-①）以下の７本は円であり[58]、これが相違点である。このことは

「すぐれた円を全体に」

などと説かれている[59]。門扉をそなえたこの根本線の内側に、門二つ分（＝８マートラ）取り、両対角線に接するまで平行に線を１本ずつ引く（図 17-②）。これが内

マンダラの根本線で、門、門扉から外廊の端(図 17-③)までの線はあるが、トーラナはない。この根本線の内側に、同様に第3のマンダラの根本線がこれと同じようにある(図 17-④)。「この根本線の内側にそれ自体の門二つ分」などと説明した金剛界の内マンダラのように[60]、第 4 のマンダラがある(図 18)[61]。以上が墨打ちの相違点である。

12.2.22 悪趣清浄マンダラ

悪趣清浄マンダラ。『ピンディークラマ』所説のマンダラのように線を引くが[62]、金剛杵輪の内側には 8 本の柱などはなく、黄色い八輻輪で飾られているというのが独自の点である(図 19)。

12.5.23 ブータダーマラマンダラ

ブータダーマラマンダラ。四角の根本線の内側に 4 マートラ離れて、両対角線に接する 3 本の平行線(図 20-①)がある[63]。その内側に 4 マートラ離れて 1 本の線が平行にある(図 20-②)。その内側に 4 マートラ離れて、文殊金剛のマンダラで述べた内院(garbhapuṭa)のような内院がある[64](図 20-③)。以上が四重の墨打ち(catuṣpuṭaṭipita)である。

12.5.24 パンチャダーカマンダラ

パンチャダーカマンダラ。根本線の内側に大マンダラ(mahāmaṇḍala)のマートラの大きさ(mātramāna)で1.5マートラ取り(図 21-①, 図22-②)、さらに 9 マートラ取り(図 21-②)、あいだを12等分し、それぞれの側面に 2 つの部分(aṃśa)[65]を取り、中心の 8 つの部分の長さの根本線ができる(図 21-③)。そのそれぞれの 8 分の 1 が門[の大きさ]である[66]。「根本線の外側に 6 本の線[67]」などというのは前と同様に定められている。このように、四方にトーラナを持たない 4 つの楼閣(kūṭāgāra)ができる。中心にも同様に 5 番目の楼閣がある(図 21-④)。9 マートラ云々というのは、ここ(=中心の小楼閣)についても[そのように]理解せよ。ただし、この[中心の]楼閣と[周囲の] 4 つの[楼閣]の間には、大マンダラの単位で 1 マートラある[68]。

この場合、ヘーヴァジュラ（Hevajra）の楼閣には、根本線の内側に１マートラ[69]を占め（図22-②）、２本の線の間にある四角い金剛杵輪（vajrāvalī）によって囲まれた半月形がある（図21-④）[70]。シャーシュヴァタ（Śāśvata）の［楼閣］はチャクラで囲まれた円がある（図21-⑤）。金剛日輪（Vajrasūrya）の［楼閣］は九角形の宝の輪（navāṃśaratnāvalī）[71]で囲まれた九角形の宝の形である。あるいは八角形［の宝］である（図21-⑥）。蓮華舞踊王（Padmanarteśvara）の［楼閣］は蓮華の輪(padmamālī)によって囲まれ、四隅を門に向けた四角（図21-⑦）、あるいは蓮華の形である。最勝馬(Paramāśva)の［楼閣］は剣の輪(kaḍgamālā)によって囲まれた三角形である（図21-⑧）。以上が墨打ちの相違点である。いずれの楼閣についても、それぞれに対応する根本線と門の単位が大きさの規準となると理解せよ。

12.5.25　六転輪王マンダラ

六転輪王マンダラ。大きい楼閣（mahākūṭāgāra）のマートラにしたがって、梵線から４マートラのところ（図23-①）までと、反対側の４マートラのところまでを12等分して、前後左右のそれぞれ２部（aṃśa）ずつ内側のところに、８部の長さの根本線を引く（図23-②）[72]。それに応じた門の大きさで、門扉（niryūha）からはじまり、外廊（kramaśīrṣa）に至るまでの線を［引く］[73]。つぎに外側に大マンダラのマートラで２マートラ取り、梵線の上で糸を保ち、円をひとつ［描く］（図23-③）。測量のためである（mānārtha）。それに正五角形を作り（図23-④）[74]、各辺の中点（madhya）から伸び、大マンダラのマートラで８マートラの梵線を［引く］。その中点にもう一方の梵線を同様に［垂直に引く］[75]（図23-⑤）。

これら２本をそれぞれ12等分し、それぞれの端から「２部」というところから、「至るまで」というところまで、直前に述べたこと[76]を行え。これら６つのマンダラに対角線も引く。これらの梵線の外側に花芯として［小楼閣のマートラで］３マートラ[77]取り、円を１周引く（図24-①）。この外側に花弁として６マートラ取り、円を1周引く（図24-②）。その外側の四方と四隅に６マートラの８つの蓮華がある（図24-③）。それから円がある（図24-④）。その外側に１マートラ取り、円がある（図24-⑤）。それから［ひとつの大楼閣と６つの小楼閣］全体から梵線と対角線を消す。このように、これが墨打ちの相違点である。

７つ以上の内院（puṭa）のあるマンダラの楼閣に固有の線は、すでに述べたことにしたがい、類推して、賢者たち（vijña）は線を引くように。

12.6 時輪マンダラ

<12.6.1>

時輪マンダラについて。太陽車[78] (sūryaratha, Tib. nyi ma'i shing rta) などを教化するため、ここで述べた [時輪タントラ] 以外のすべての経典でお説きになられた儀軌とは異なる儀式の方法が [時輪タントラでは] 語られた。そのため究竟次第のヨーガ行者たち (niṣpannakramayogin) は、「吉祥金剛持 (śrīvajradhara) こそは、すべてのマンダラの主宰神 (īśvara) として、さまざまな姿をとって、願望をすべて成就させるために現れた」[79] ということを確信するがゆえに、たとえ別のタントラの儀軌によるプラティシュター (pratiṣṭhā) などの儀式であっても [時輪タントラの場合と] 矛盾することはなく、願望を成就させるというので、時輪として儀礼行為を変更しないで、[時輪タントラ固有の] マンダラの墨打ちだけを述べよう[80]。彩色については後述の彩色のところで述べられるべきである[81]。

<12.6.2>[82]

この場合、阿闍梨の親指の24つ分で1ハスタである[83]。4ハスタでマンダラ[84] [の大きさ] になる。その2倍の長さである8ハスタの2本の梵線を引く。次に同様に2本の対角線を引く。糸は阿闍梨の1ヤヴァ (yava)[85]の太さがある。この場合、意密マンダラ (cittamaṇḍala) の門の6分の1が親指半分の長さで、1マートラとして採用すべきである[86]。

ここで梵線の臍 (nābhi) のところに主要尊の蓮華の花芯 (kamalakarṇikā) として、梵線の外側に2マートラ取り、もう一方の梵線の上で [糸を] 握り、線を一周引く (**図25-①**)。次に蓮弁 (dala) として4マートラ取り、線を引く (**図25-②**)。次に金剛杵輪 (vajrāvalī) として1マートラ取り、線を引く (**図25-③**)。次に尊格の蓮華 (devatāpadma) として4マートラ取り、線を引く (**図25-④**)。次に金剛杵輪として1マートラ取り、線を引く (**図25-⑤**)。これらの4本の線は2本の対角線の間に引くのである[87]。

<12.6.3>

この場合、尊格の4マートラの中央に [直径] 4マートラの蓮華がある[88] (**図25-⑥**)。その両側に柱 (stambha) があり、太さは1マートラずつで、長さは4マートラである (**図25-⑦**)。これらの両側に幅が3マートラの瓶 (kalaśa) が二つあり、

長さは同じ［4マートラ］である（図25-⑧）。これらの両側に同様に2本の柱がある（図25-⑨）。

次に対角線に両端を接した最後の線の外側に7マートラ取り、線を1本引く[89]（図25-⑩）。次に尊格の帯（devatāpaṭṭī）として4マートラ取り、線を一本引く[90]（図25-⑪）。次に1マートラ取ったところに根本線があり（図25-⑫）、対角線に両端を接する。この場合、根本線の内側のみが意密マンダラである。口密マンダラ（vāṅmaṇḍala）も同様である。身密マンダラ（kāyamaṇḍala）も同様である。

根本線上で梵線の左右にそれぞれ3マートラずつ離れて前と同様に[91]線を消すと、6マートラの門となり、マンダラの8分の1になるのである[92]。門と等しく、大きさの同じ門扉（niryūha）（図26-①）とカポーラ（kapola）（図26-②）、パクシャ（pakṣa）[93]（図26-③）がある。

＜12.6.4＞[94]

根本線の外側に1.5マートラ取り、壁（bhitti）の線があり（図26-④）、対角線から出て、門扉、カポーラ、パクシャに沿って進み、3カ所で折れ曲がり、外廊（kramaśīrṣa）の線（図26-⑤）まで至る。その横にトーラナの柱（toraṇastambha）として1.5マートラ取り、外廊の線に先端が接する線があり（図26-⑥）、内側は長さが7.5マートラである[95]。根本線の外側の線[96]よりも外にヴェーディーとして3マートラ取り、線がある（図26-⑦）。次に宝の帯として1.5マートラ取り、線を引く（図26-⑧）。次に瓔珞半瓔珞の帯として3マートラ取り、線を引く（図26-⑨）。次にバクリーの帯として1.5マートラ取り、線を引く（図26-⑩）。次に外廊の帯として1.5マートラ取り、外廊の線を引き（図26-⑤）、その長さは対角線からもう一方の対角線までである。ヴェーディー以下の4本の線［の長さ］は、別の線までである[97]。この場合、1本の柱の上から2本目の柱の上にまで至る線が、シリースーチャカで（図26-⑪）、この内側に外廊などは描かないのである[98]。

＜12.6.5＞[99]

柱の上にあるトーラナは門の大きさの3倍で[100]、上に向かって立っている。これはまた3段（tripura）からなり、［高さは］はじめが6マートラ（図27-I）、2番目が4.5マートラ（図27-II）、3番目は3.5マートラである（図27-III）。ハルミ（harmi）は［高さが］2マートラである（図27-①）。その上に2マートラの瓶（kalaśa）がある（図27-②）。

このうち、1段目は［トーラナの］柱の上に［幅が］1マートラの帯（paṭṭī）があり（図27-③)、長さは24マートラある。その上に［幅が］1マートラのマッタヴァーラナ（mattavāraṇa）[101]の帯があり（図27-④)、長さは16マートラである。その上に中央には［一辺が］4マートラの正方形があり（図27-⑤)、供養女尊の場所（pūjādevīsthāna）である。その左右には［幅が］1マートラの柱がある（図27-⑥)。この二つの［柱の］横には、同じような供養女尊の場所がある。その横にふたたび［幅が］1マートラの柱がある[102]。その両側のトーラナの柱の上には2頭の象王[103]が足をかけ、その頭の上には2頭の獅子が乗る（図27-⑦)[104]。

［獅子の］2つの頭と4本の柱の上に［幅が］0.5マートラ[105]の帯があり（図27-⑧)、長さは18マートラである。その上に［幅が］1マートラのマッタヴァーラナの帯があり（図27-⑨)、長さは12マートラである。その上に3マートラの帯があり、長さは12マートラである。ここにはそれぞれ［幅が］0.75マートラの柱が4本ある（図27-⑩)。柱の間にはそれぞれ3マートラの尊格の場所（devatāsthāna）[106]が三つある（図27-⑪)。外の柱の両側には2人のシャーラバンジカー（śālabhañjikā）[107]がいる（図27-⑫)。

これら2人の［シャーラバンジカー］の頭と柱の上に［幅が］0.5マートラの帯があり（図27-⑬)、長さは15マートラである。その上に［幅が］1マートラのマッタヴァーラナの帯があり（図27-⑭)、長さは8マートラである。その上に［幅が］2マートラの帯があり、長さは8マートラである。そこにはそれぞれ［幅が］0.5マートラの柱が4本ある（図27-⑮)。柱の間にはそれぞれ2マートラずつの尊格の場所が3つある（図27-⑯)。外の柱の両側には2人のシャーラバンジカーがいる（図27-⑰)。

その上には［幅が］0.5マートラの帯があり（図27-㉑)、長さは12マートラである。その上にはハルミがあり（図27-①)、長さは8マートラである[108]。その上に瓶がある（図27-②)。その左右には幢幡の竿（dhvajadaṇḍa）のための場所がある。同様にすべての帯の先のところには鈴（ghaṇṭa)、払子（cāmara)、鏡（ādarśa)、幢幡（dhvaja)、旗（patāka）がある。

<12.6.6>[109]

この場合、意密マンダラの根本線の外側に口密マンダラがある。その四方それぞれにある12マートラのところが意密マンダラの壁から始まり、外廊の端に至るまでの帯（図28-①）によって占められている[110]。その外に7マートラ取り、線が1本

ある（図 28-②）。次に 4 マートラの尊格の帯を取り、線が 1 本ある（図 28-③）。この帯には 4 マートラの蓮華がある[111]。しかし四方にある意密マンダラのトーラナの下にある［蓮華］は、2段目のマッタヴァーラナ以下の 4 マートラのところでは、2本の柱のために0.5マートラ［内側に］ずらして描け（図 27-㉒）[112]。次に尊格の帯の線から外側に 1 マートラ取り、根本線がある（図 28-④）[113]。これら 3 本の線の長さは対角線に接するまでである。根本線の梵線［と交わるところ］から左右にそれぞれ 6 マートラずつ、前と同様に消せば、12マートラの門となる。次に、門扉からトーラナの［上の］端までは意密マンダラの門扉以下［トーラナの上の端までの］2 倍の大きさとなる[114]。

＜12.6.7＞[115]

この口密マンダラの根本線の外側が身密マンダラである。その四方それぞれにある24マートラのところを、口密マンダラの外壁から始まり外廊（図 28-⑤）に至るまでの帯が占めている。その外側に11マートラ取り、線を引く（図 28-⑥）。その外側に12マートラ分、尊格の帯を取り、線を 1 本引く（図 28-⑦）。この尊格の帯には12の蓮華があり（図 28-⑧）、それぞれ12マートラである[116]。ここで12マートラの蓮華を 7 つに分け、中心の一つ分が花芯である。［その］左右の一つ分に 4 つの蓮弁がある。その左右［一つ分］に 8 つの蓮弁がある。その左右［一つ分］に16の蓮弁がある。このように 3 つのマンダラで蓮弁が28となる[117]。

尊格の帯の線の外側に 1 マートラ取り、根本線を引く（図 28-⑨）。これら 3 本の線（図 28-⑥⑦⑨）の長さは対角線に接するまでである。根本線のうち、梵線［と交わるところ］から左右にそれぞれ12マートラずつ、前と同様に消せば、24マートラの門となる。次に、門扉からトーラナの［上の］端までは口密マンダラの門扉以下［トーラナの上の端までの］2 倍の大きさとなる[118]。水輪（jalavalaya）の半分のところまで［トーラナは］入り込んでいる[119]。口密マンダラのトーラナの外側の、身密マンダラの門の中央には12マートラの戦車（ratha）がある[120]。

＜12.6.8＞[121]

次に地輪（pṛthvīvalaya）があり、12マートラである（図 29-①）。その外に水輪（jalavalaya）があり、24マートラである（図 29-②）。次に火輪（agnivalaya）があり、24マートラである（図 29-③）。次に風輪（vāyuvalaya）があり、24マートラである（図 29-④）。風輪の外側に虚空輪（ākāśavalaya）があり、12マートラであ

る(図29-⑤)。この輪の外側に火炎輪(raśmijvāla)があり24マートラである(図29-⑥)。地輪以下のこれら6つは、それぞれはじめに円がある。火炎輪の端にも[円が]あり、[全部で]7周の円がある。

このように、これは意金剛(cittavajra)を主尊(nāyaka)とし、[身口意の]3つのマンダラからできたマンダラである。この線は8ハスタで、地輪のはじめの線までである[122]。以上が第1の説である。

<12.6.9>

しかし、ここでの意密マンダラの門の大きさ(=6マートラ)と口密マンダラの門の大きさ(=12マートラ)を合計し、門を18マートラと計測し、その6分の1をマートラー(mātrā)とした場合[123]、このマートラーによって、主尊の蓮華の花芯から火炎輪の端までのマートラーの数を数えなければならない。この場合、意金剛を主尊とし、三つのマンダラからなるマンダラは[一辺が]12ハスタで[124]、その2倍の糸[すなわち]24ハスタが地輪のはじめの線までである[125]。これが第2の説である。

世尊、意金剛を語金剛の場所に移し、語金剛(vāgvajra)が主尊となり、その他の尊格などをお据えするのは第1の説と同様で、また中心の4ハスタのマンダラと、その2倍が二つ目の[意密マンダラ]、その2倍が三つ目の[身密マンダラ]である場合、[3つのマンダラからなる]口密マンダラは[一辺が]16ハスタであり、その2倍にした糸は32ハスタとなり、地輪のはじめの線までである。これが第3の説である[126]。

はじめに述べた意密マンダラの門の大きさ(=6マートラ)と、はじめに述べた心マンダラの門の大きさ(=24マートラ)を合計し、門を30マートラと計測し、その6分の1をマートラーと考えた場合[127]、このマートラーによって主尊の花芯から火炎輪のはずれまでのマートラーの数を数えなければならない。世尊、意金剛も身金剛(kāyavajra)の場所に移し、身金剛が主尊となり、その他の尊格などをお据えするのは、第1の説と同様で、この場合、身金剛を主尊とし三つのマンダラからなるマンダラは20ハスタで、その2倍の糸は40ハスタとなり、地輪のはじめの線までである。これが第4の説である[128]。

<12.6.10>

このように『無垢光』(Vimalaprabhā)にも「8ハスタの糸」という根本[タン

トラ］に関して、「８ハスタというのはマンダラの２倍で」と注釈し、「この場合、本初仏[129]については、意密マンダラを12ハスタにせよ。糸は24ハスタである。このように口密マンダラは16ハスタである。身密マンダラは20ハスタである。このことは、糸が［マンダラの］２倍になることから確定している」と説かれている[130]。また灌頂（seka）のために再び中心のマンダラ（garbhamaṇḍala）だけを描くことが許され、次のように説かれる。

「あるいは灌頂のためのマンダラは、部族にしたがって外の輪（bāhyacakra）が省かれる[131]。」

しかし『降三世タントラ』（Trailokyavijayatantra）には「門はチャクラの９分の１」と説かれ[132]、『大マンダラ荘厳タントラ』（Mahāmaṇḍalavyūhatantra）にも「［門は］チャクラの10分の１」と説かれているが[133]、現在では阿闍梨たちはそのようにはしないので、我々も［その説は］採らない[134]。

マンダラの大きさはすでに確定しているといわれるが、必ずしもそうではない。世尊は次のようにお説きになっている。

「閻浮堤の自在者か、あるいは王か、あるいは転輪王たちの外的なマンダラ（bahyamaṇḍala）が１ヨージャナ（由旬、yojana）の大きさで完全に描かれる。賢者たち（vipaścit）は教化さるべきものの心をよく観察し、望んだ通りの大きさにすれば、いったいどんな誤りがあろう。自分の望んだ通りにすべてのマンダラを手のひら（hastatala）に描けば、論書（śāstra）に説かれた利益をなす。［マンダラを描くのが］地面の上などであれば何もいうことはない[135]。」

数え切れないマンダラの相違点をいったいどれだけ説明することが可能であろうか。世尊もおっしゃっている。

「真実そのままに（yathātathyaṃ）マンダラを測量することが誰ができようか。自己の尊格（svādhidaivata）とのヨーガをなしたものが、マンダラを作ることを成就するのだ[136]。」

12.7　墨打ちのまとめの偈

＜12.7.1＞

墨打ちを要約した偈頌（sūtraṇasaṃgrahaśloka）。

東などの四方の点の上に固定した糸で［描かれた］四つの円によって、魚の尾と頭の端（matsyapucchāsyānta）[137]までの梵線と、対角線［を引く］。四

隅において、その7つの「方角」(＝4)と門[の大きさ](＝32)[138]、すなわち1ハスタなどの長さの根本線[を引く][139]。中央の8分の1のところを消すと門となり[140]、その4分の1が1マートリカー(mātrikā)である[141]。

根本線(図30-①)の外に1、2、1、2、1、1[マートラ]のところに6本の線(図30-②～⑦)を[引く]。対角線から水平に梵線から順に長さが3マートラのところまでに、はじめのふたつの線(図30-②③)[を引く]。[これらは]2マートラの線(図30-⑫)と[先端が垂直に]接する。[梵線から]8マートラのところに3本の線(図30-④～⑥)。ヴェーディー(vedī)の線[142]から垂直に4本の線(図30-⑧～⑪)を[引く]。[このうち]3本の線(図30-⑧～⑩)は5マートラ、4番目の線(図30-⑪)は4マートラ。そのはじめの線(図30-⑧)には水平の線(図30-⑤～⑦)の先端が接する。3本の線(図30-⑨～⑪)は1マートラずつ離れている。4本目の線(図30-⑪)の端から10マートラの垂直の線(図30-⑰)を[引く]。根本線の先端から出た線(図30-⑬)は4マートラで、さらに2マートラ(図30-⑮)水平に、さらに[2マートラ]垂直に(図30-⑮)、そこから水平に8マートラ(図30-⑯)、[合計]3カ所で折れ曲がっている[143]。

<12.7.2>

[トーラナの]柱の先から外に向かって1マートラずつ取り、線を[引く]。この11の線のうち、第5と第7は1.5マートラずつ[144]。あるいは第3、第7、第9は1マートラずつ、第4、第6、第10はそれぞれ0.5マートラずつ、[残りの]5つは1.5マートラ[145]。この場合、2つの説に分かれる。

梵線の左右に矢(＝5)に0.5マートラ加えたマートラ[146]だけ離れて、2.5マートラの帯(図30-⑰)[147]。3.5マートラの線(図30-⑱)。6マートラ離れて第2(図30-⑲)、第3[の線](図30-⑳)は3マートラ。4マートラ離れて第4[の線](図30-㉑)は5マートラ。第5[の線](図30-㉒)は3.5マートラ離れて4.5マートラ。季節(＝6)[148][の線](図30-㉓)は3.5マートラ離れて5マートラ。[第7から第10の]4本の線(図30-㉔～㉗)は7マートラ。ルドラ(＝11)[149]の線(図30-㉘)は矢(＝5)のマートラである。

第5の帯の上の部分は水平に3.5マートラ。第7[の帯]は下に3マートラ、上に6マートラある。帯のはしにある線[を引く](図30-㉙㉚)[150]。内側にも、それとは別のものに続く1本の折れ線を[引く](図30-㉛)。さらに内側に0.5

マートラ離れて同様に別の［折れ線を引く］（図 30-㉜）。

その外にヴェーダ（＝4）[151] のマートラだけ離れて円を引く。そして2マートラずつ離れて2本の円を引く。4マートラ離れてさらに［円を引く］[152]。

<12.7.3>

カポーラとパクシャが門と同じ長さ（＝4マートラ）の場合、［門の内部の］闇の帯（andhapaṭṭikā）はない[153]。トーラナが水平方向に門の3倍の場合、垂直方向にはそうではない[154]。その場合、適切な長さでヴェーディーの線から垂直に3本の線[155]。

異なる説では[156]、トーラナを作るときのルドラ（=11）の帯は、財（＝8）、財、太陽（=12）、ジナ（=24）、財、ジナ、太陽、財、太陽、ジナ、財という順番である。［これらは］門を分割した垂直方向の大きさである[157]。これらの［帯の］水平の［長さが］説かれる。梵線の左右に、4.5マートラ[158]離れて2.5マートラの帯（図 31-①）。［その上の］線は3.5マートラ[159]（図 31-②）。第2（図 31-③）と第3（図 31-④）は5マートラ離れて3マートラ。第4（図 31-⑤）は4マートラ離れ3マートラ。第5（図 31-⑥）は3.5マートラ離れ3.5マートラ[160]。第6（図 31-⑦）は3マートラ離れ5マートラ。そして［第7からの］3本（図 31-⑧～⑩）は8マートラ。［第10の線（図 31-⑪）として］7マートラの線を1本。最後［の第11（図 31-⑫）］は6マートラ[161]。その外にヴェーダ（＝4）のマートラのところに円。そして2マートラ離れて線。2マートラ離れて円。最後は4マートラ離れる[162]。

<12.7.4>

梵線から8マートラのところと7マートラのところに円[163]（図 1-⑤⑥）。そこから出て、もう一方の境にまで至る2本の線を、梵線の外側2マートラと3マートラのところに順に［引く］（図 1-⑦⑧）。外の円の外側で、そこから1マートラ離れて［さらに］外の円[164]（図 1-⑨）。そして3マートラ離れて、対角線のあいだに引かれる線（図 1-③）。すべてのところにある梵線と、内院（koṣṭha）と帯のところの線を消す。

<12.7.5>

根本線の内側のマンダラ（mūlābhyantaramaṇḍala）では、尊格の違いに

よって、その他の墨打ちはいささか異なる。サンヴァラの［マンダラ］について述べよう。梵線と対角線以外の線はない。この梵線の両側に2マートラ離れて線を根本線に至るまで［引く］(図8-②)。同様に対角線の両側にも［引く］。長さはその［マンダラの］中心の両側に、門4つ分（＝16マートラ）ずつである。臍（nābhi）の外に4マートラ離れて4マートラの線を、梵線と対角線に垂直に［引く］(図8-③)。そこからさらに2マートラずつ離れて同様に5本の線を［引く］(図8-④～⑧)。対角線上では第6の線を［引く］(図8-⑨)。梵線および対角線の左右では、7つのうち、第5と第3と第1のところで、1マートラずつ中に入る。それぞれの第2番目（すなわち第6、第4、第2）では、［4マートラの線の］先に至り、7番目では中に入る。5箇所で折れ曲がった一本の線ができる（図8-⑩)。その内側にも0.5マートラ離れて別の線を［はじめの線と］同様に［引く］(図8-⑪)。5つの円を、梵線から、王（nṛpa＝16)、太陽（sūrya＝12)、蛇（ahi＝8)、水（ambu＝4)、目（akṣi＝2）ずつ順に離れて［引く］(図9-①～④)。はじめの3つの内側には0.5マートラずつ離れて3つの円も［引く］[165]（図8-⑤～⑦)。円と輻以外の［補助のための］線は消す[166]。

多言をおそれ、［これ以外の各マンダラの］相違点のまとめはしない。

12.8 墨打ちの終了

次に、墨打ちが終わるときには、はじめにプージャーを行い、「オーム、アーハ、フーム、金剛よ、ムッフ」(oṃ āḥ hūṃ vajra muḥ) と唱え、智慧の糸 (jñānasūtra) にお帰り願い、虚空にいる如来の心臓に挿入し、五色の糸を適切な場所に安置せよ。

以上が墨打ちの儀軌である。

訳　注

(1)　マートラ（mātra）はマンダラを描くときの基準となる単位。1マートラはマンダラの直径の96分の1。4マートラが「門の大きさ」で、これもマンダラの墨打ちの基本の単位として用いられる。

(2)　円を描くための説明である。マンダラの中心に糸の一方の端を固定し、もう一方は梵線上、すなわち東西南北のいずれの方角か、あるいは北東の対角線上で、中心から8マートラのとこ

ろにあてて、そこから糸をコンパスのようにして右回りに円を引く。この円の内部が「中心のマンダラ」(garbhamaṇḍala) と呼ばれ、直径が16マートラある。なお、森 (1997: 126-127, 2004: 101) では対角線の長さがVAで「門17個分」とあるところを、「マンダラの中心から」と理解したが、全体の長さが17個分であると訂正したい。対角線を必要とするのは、墨打ちの儀軌では楼閣内部の線を引くときと、彩色で楼閣内部の四方を塗り分ける場合に限られ、楼閣の外にまで引く必要はない。原則として、VAでは不要な線をできるだけ引かないように、墨打ちをすすめることと、線の長さを示すときには、マンダラの中心からの距離で表すことはなく、全体の長さを示すことが、その理由である。

(3)　中心のマンダラと同心の円で、14マートラの直径を持つ。

(4)　ここで引かれているのはマンダラの内部の井桁の線で、楼閣内部の柱を表す。それぞれの柱には五仏を象徴する金剛杵や法輪などのシンボルが描かれる。柱の装飾については第13儀軌「彩色の儀軌」で説かれる。

(5)　この結果、中尊のシンボルを描く部分は一辺4マートラの正方形に、四仏を置く四方の区画は幅が4マートラ、高さがもっとも長いところで4マートラとなる。

(6)　糸は阿闍梨と補助者の2人で持って墨打ちをするため、ここで示されているのは阿闍梨の位置であろう。補助者は当然、阿闍梨とは反対の方角に位置する。南北に伸びる線をはじめに引き、続いて東西の線を引く。ただし、いずれの場合も、阿闍梨と補助者は位置を交替しながら引くことがわかる。そのため、線を引くものはマンダラのまわりを必要以上に移動するが、阿闍梨が右手を用いて引きやすい位置をつねに占めるための方法であろう。これは根本線を引くときにもとられた方法である。<12.1.7>参照。

(7)『ヴァジュラダーカ・タントラ』(VDT) にはまったく同じことばは含まれないが、おそらく次の一節を指しているのであろう。

内側の輪は金剛の鉆と光のマンダラを、2段階で、東北の隅からはじめ、右回りに円を描く。
nang gi 'khor lo rdo rje ra // 'od kyi dkyil 'khor rim gnyis su //
dbang ldan mtshams nas brtsams nas ni // g'yas skor du ni skud pa bskor // (VDT, TTP, No. 18, Vol. 2, 134.4.3-4)

VAの引用では、外側の円 (図1-⑤)、すなわち梵線から8マートラのところの円からさらに外に1マートラ離れて円 (図1-⑨) を引き、火炎輪の帯を作ることになるが、これは前の段落ですでに述べた線の規定とは一致しない。そこでは火炎輪の帯はなく、半径8マートラと7マートラの二つの円を描き、その間を金剛杵輪とする。ただし、後述の「墨打ちのまとめの偈」<12.7.4>ではVDTと同様に、三重の同心円を描き、火炎輪と金剛杵輪の二つの帯を作ると述べる。偈頌と散文に見られるこの不一致については、ツォンカパがガリムの中で指摘している[NRC 115.5]。

(8)　いくつかの写本で以下の下線部のような異読があることが注目される。

「その外側に1マートラずつ取り、7本の線を [引く]。8本目の線も [引く]。[これらの線は]4つと半分の門の大きさ、あるいは火炎の線をはなれ (saptasūtrāṇi aṣṭāv api sārddha-caturdvāramānāny atha vā raśmisūtraṃ hitvā)、7本目の線は楼閣の外廊の線までである」

この方法で引いた場合、8本の線は18マートラの長さを持つことになる。これは直径16マートラ

の円よりもはみ出すことになるが、円を引いたあとで、不要な部分は消される。なお、チベット訳は本文で示した読みに一致する。

(9) ここで述べられた方法は、<12.2.4>で門とトーラナの線を描くときに説明された「途切れずに描く方法」に関連する。門とトーラナを描くときに、梵線から2マートラ離れて、梵線と平行に線を引き、以下、1マートラおきにさらに6本の線を引き、最後に不要な線を消す方法が説明されている。そこと同じ線が楼閣内部の柱の線として用いられるのである。したがって、この段階で引くのではなく、楼閣の墨打ちをした段階で、これらの線はすでに引かれている。なお第7の線はトーラナの一番外側の線で、門や内陣の部分では必要がないため、外廊まで、すなわち側面線までしか引かれないのであろう。ただし、前注で示した異読をとる場合、門とトーラナを描くときに引いた線ではなく、楼閣内部の線としてあらためて引くことになるが、楼閣内部に必要な第1、第2以外の6本の線を、なぜこの段階で引くのか不明。

(10) この段落と前の段落で説いた二つの方法を指す。

(11) この言葉の意味はよくわからない。これまで「墨打ち」の訳語をあててきたのは「線を引くこと」(sūtraṇa) という語であったが、これ以降の各マンダラの説明では、締めくくりの言葉としてṭipaṇīの語がしばしば現れる。墨打ちの動作そのものを指す語であろうか。この語は写本の間での読みの異同も多く、ṭipaṇī, ṭippaṇī, ṭipiṇī, ṭṭipanī, ṭṭipini, ṭipinī, ṭipenīなどが現れる。また ṭipi や ṭippita というおそらく同義の語が用いられる場合もある(<12.5.2><12.5.14><12.5.15>など)。

(12) 著者はジュニャーナパーダ流の文殊金剛マンダラについて、中尊の文殊金剛を語金剛(Vāgvajra)に変更したマンダラを念頭に置いている。語金剛は西方の無量寿と同体であるため、このマンダラでは文殊金剛は無量寿と入れ替わって西に位置することになる。この中尊の変更はNPYの第1章でも示されている(森 1994: 133)。語金剛を中尊とするマンダラは『秘密集会タントラ』第16章に説かれる「語金剛マンダラ」(vāgvajramaṇḍala)におそらくもとづく。種村(2002: 5-6)も参照。

(13) ここで言及される「外のマンダラ」は、一辺32マートラの根本線で囲まれた楼閣の内部空間を指す。「外のマンダラ」という語が指す部分が、文献や時代によって異なることについては森(1996)参照。

(14) 「8つの小マンダラのごときチャクラ」は<12.5.1>で説明された直径16マートラの円を指す。その内部は井桁の柱で区切られた9つの区画があり、中心以外の8つの区画を「小マンダラ」と呼ぶ。「8つの小マンダラ」がマンダラの定義として用いられることについては、松長(1999: 60)と、それをふまえた田中(2001: 9-11)参照。

(15) 前注でも述べたように、ここでは「外のマンダラ」は楼閣の内部に相当する32マートラの正方形を指す。その半分の大きさである16マートラが、内部の円の直径となる。

(16) 直径16マートラの円の内部で、その1マートラ内側に描かれる円(金剛杵輪に相当)と、内部を井桁状に区切る幅1マートラの区画を指す。

(17) ディーパンカラバドラ(Dīpaṅkarabhadra)の『マンダラ儀軌四百五十』(*Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*)のテキストは以下の通り。

zur bzhi pa la sgo bzhi pa // rta babs bzhis ni rnam par mdzes //
thig bzhi dang ni yang dag ldan // ... dkyil 'khor phyi rim thig gdab bo //

de yi nang gi 'khor lo ni // dkyil 'khor brgyad pa 'dra ba la //
phyi yi 'khor lo'i phyed kyi tshad // kun nas yongs su zlum por bya //
ka ba 'khor lo la sogs spras // rdo rje phreng ba bzang pos bskor // (TTP, No. 2728, Vol. 65, 39.5.8-40.1.2)

(18) 『マンダラ儀軌四百五十』のテキストは以下の通り。
'khor lo la sogs ka ba'i thig // tshon gyi sa dang sa gzhi mnyam // (TTP, No.2728, Vol. 65, 40.1.4)

「ラジャスの区画」は楼閣の外壁の一番外側の部分で、幅は1マートラである。金剛杵輪と柱の幅がこれに一致する。引用文のはじめの「輪と柱」は、前の引用文と同じ部分を指す。

(19) <12.5.1>で示されたVDTの説が、著者にとって異説であることが、ここからわかる。

(20) ナーガブッディ（Nāgabuddhi）の『マンダラ儀軌二十』(*Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*) からの引用。テキストは以下の通り。
rtsa ba'i thig gi phyed kyis ni // nang gi dkyil 'khor tshad yin te // (TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.2.6) .

(21) テキストは「ヴェィーディー」ではなく「ヴェーディ」(vedi) とあるが、おそらく韻律の関係であろう。「ヴェーディカー」とあるのも同様。

(22) はじめの線と第2の線が柱に相当し、第3の線が「中心の輪」の内側の円、第4の線が金剛杵輪と火炎輪のあいだの線となる。後のふたつの線は基準となる梵線と垂直に交わる、もう一方の梵線上での距離が示されている。

(23) これもナーガブッディの『マンダラ儀軌二十』からの引用。テキストは以下の通り。
'od zer lnga yis rnam brgyan cing // rdo rje phreng bas 'bar bar bya //
nang gi dkyil 'khor phyi rol tu // thig bzhi yang dag bri bar bya //
nang du ka ba brgyad po ni // 'khor los mtshan cing legs mdzes bri //
rdo rje ka ba'i bar dang bar // de nyid du ni re mig dgu // (TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.2.6-8) .

はじめの偈は、現在のチベット大蔵経におさめられているチベット訳テキストには含まれない。ツォンカパはパツァプ（Pa tshab）による翻訳にはないが、ヤル（dByal）による翻訳には含まれ、そこではヴェーディカー（stegs bu）を「臍」(lte ba) と訳していることをNRCで指摘する[NRC115.4-5]。パツァプによる翻訳は、現行のチベット大蔵経所収の『二十儀軌』の翻訳者として、コロフォンにあげられている（bod kyi sgra sgyur gyi lo tsa ba chen po vande pa tsab nyi ma grags kyis bsgyur pa'o, TTP, Vol. 162, 18.3.5)。「ヤルによる翻訳」とは、同じ『二十儀軌』をヤルすなわちチュージェペル（Chos rje dpal）が翻訳したと考えられるが、おそらくこの翻訳は現存しない。プトンの大蔵経目録でも『二十儀軌』の訳者はパツァプとする（西岡 1983: 83)。なおチュージェペルはVAの翻訳者でもある。

最後の偈の「金剛杵が印され・・・金剛の柱の内側にある」という規定について、ツォンカパは以下のような文献をあげて、その構造を議論する。

Abhayākaragupta, *Śrīsaṃpuṭatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī*, TTP, No. 2328, Vol. 55, 180.5.3.[NRC 120.4]

de'i steng du so so yang dag pa rig pa bzhi rnam par dag pas gdung bzhi ste /

gzhan gyi don gyi khur khur bar nus pa nyid kyi phyir ro //

Śākyamitra, *Kosalālaṃkāratattvasaṃgrahaṭīkā*, TTP, No. 3326, Vol. 70, 233.1.2. [NRC 120.5]

sgo re re'i thad kar yang ka ba gnyis gnyis ste / mtha' gcig ni rdo rje'i thig la brten la / mtha' gcig ni dkyil 'khor gyi lte ba la brten to //

Buddhaguhya, *Dharmamaṇḍalasūtra*, TTP, No. 4528, Vol. 81, 109.3.1-5. [NRC 121.1]

phyi dbyibs mchod rten mkhar thabs dang // rgyal khab ri bo'i gur du 'dod // ...
phugs na ka ba brgyad po yis // gdung chen bzhi yi rtse nas bteg //
gdung chen bzhi yi re mig kyang // phyam rtsa nyi shu brgyad kyis btab //
de bzhin gral thog ci rigs pa'o //

(24) この部分は写本の間で読みが異なる。「円の線の終わりのところから」(vṛttasūtrānta) という語が「0.5マートラのところまでが」の前にある場合とない場合がある。CとDはもともと後者の読みであったが、前者のように訂正している。Eも一部に異同があるが、前者と同じ読みを示していたと考えられる。Fには混乱が見られる。残りのABGが後者の読みを示す。ここでは後者にしたがう。なおチベット訳 (zlum po'i thig gi mtha' nas cha chung phyed kyi bar du) は前者である。

(25) <12.5.1.1>の最後の部分を参照。

(26) チベット訳は「中心として1マートラ取り」(dbus kyi cha chung dor bar)。

(27) ジュニャーナダーキニーマンダラの四方にはヴァジュラダーキニーなどの4尊の女尊が位置する。

(28) 17尊のヘーヴァジュラマンダラには、心髄ヘーヴァジュラ (garbhahevajra)、心ヘーヴァジュラ (citta°)、口ヘーヴァジュラ (vāk°)、身ヘーヴァジュラ (kāya°) をそれぞれ中尊とする4種のマンダラがある。

(29) 花芯と花弁は、ほとんどのマンダラで同じ大きさをとる。ここでも両者は5.25マートラである。花芯や花弁の大きさにこのような端数が生じるのは、直径16マートラの円の中に蓮華を描くためであろう。花芯と花弁を同じ大きさにするために、3分の16マートラに近い5.25マートラを採用したと考えられる。直径の16マートラという数は、根本マンダラの一辺の半分に相当するが、これは<12.5.1.3>でも引用されている「外のチャクラの半分の大きさで [中の] チャクラを」という規定に、できるだけ合致させようとしたためか。

(30) マハーマーヤーは男尊であるが、名称が女性名詞であるため、「マハーマーヤーの姿をした」(mahāmāyārūpa) と複合語にして男性名詞にする。SMでは「マハーマーヤーと呼ばれるもの」(mahāmāyāhvaya) という用例もある (Mori 1993: 132)。

(31) 基準となるこれらの線が、いずれも4マートラのところで第一の線と交わることを指す。

(32) Mss. BCD はこの「両側の線と垂直にそれぞれ2マートラずつあるからである」の一文を欠く。ただし、CとDでは欄外に本文とは別の筆跡で補われている。

(33) 梵線の場合、この6番目の線は根本線に一致するため引く必要はない。この線ははじめの線を第1の線とした場合、7番目の線になる。

(34) **(根本線から取りかかり・・・「輻をそなえたもの」の環がある)**

Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 279.3.4-5. [NRC

116.2]

rtsa ba'i thig nas brtsam byas te // 'khor lo gsum po dag la ni //

thig bzhi dag ni bskor nas su // sgo yi tshad kyis bya ba'o //

lhag ma padma 'dab ma brgyad // 'khor lo'i rtsibs las lhag par bya //

rdo rje padma 'khor lo'i phyed // thugs kyi 'khor rtsibs mu khyud rnams //

(35)　花芯も花弁もいずれも2.5マートラの大きさをもち、それを取り囲み0.25マートラの間隔で2つの円が描かれる。これは<12.7.5>の「墨打ちのまとめの偈」の中で示されるサンヴァラマンダラの規定とは異なる。そこでは大楽輪は一重の円で囲まれ、蓮弁が2マートラ、花芯が4マートラである。この不一致については、ツォンカパがNRCの中でも指摘している[NRC 116.2]。

(36)　この説の場合、第4の円（**図9-④**）の内側に、0.25マートラではなく0.5マートラ離れて円が描かれる。これにあわせて、花芯と花弁の大きさが変更されるかどうかは不明であるが、もし両者を等しくするのであれば、3分の7マートラずつとなる。ツォンカパによれば、これはジャヤバドラのマンダラ儀軌にも説かれる。

Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 279.3.5. [NRC 116.2]

rdo rje la sogs drag po ni // re khā gnyis par bzhi bri'o //

(37)　輻は三密輪の八方向にある菱形で表された部分で、その両側とは6つの同心円（**図9-①～③、⑤～⑦**）で作る幅5マートラの帯のことである。ここに金剛杵を描くという説が紹介されている。ツォンカパによれば、これはヴィブーティのマンダラ儀軌にも説かれる。

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 79.4.5-6. [NRC 116.2]

rtsibs kyi logs kyi steng du rdo rje dang padma dang 'khor lo'i phreng ba'o //

(38)　マンダラの中心にある直径7.5マートラの大楽輪を描かない。

(39)　6番目の円は直径が15マートラであるため、蓮弁の部分の幅は5マートラで、中心の部分の「雄しべの姿をした円」も直径が5マートラとなる。森（2001: 31）で示した図は誤り。

(40)　チベット訳は「2.5マートラ」(cha chung phyed dang bcas pa'i gsum)。Ms. Eも「2.5マートラ」であるが、文脈からは3.5マートラが妥当であろう。

(41)　<12.5.2>参照。マンダラの中心にある直径8マートラの円の内部である。

(42)　典拠は不明。43尊からなる文殊金剛マンダラは<12.5.20>を参照。このマンダラは二重の楼閣をもつ。

(43)　これらの説についても典拠は不明。

(44)　羯磨杵の中心部分で、鈷がそこから四方に伸びている。

(45)　五鈷杵であることを表す。**図10**ではこれらの鈷は省略されている。

(46)　<12.5.1>参照。

(47)　チベット訳は「1マートラ」(cha chung gcig)。

(48)　この後に第2の内マンダラを作るので、それと区別して全体の楼閣の門の大きさであることを述べたのであろう。

(49)　「トーラナなど」というのは、トーラナの上に置かれた法輪や鹿などを指すのであろう。なお金剛界大マンダラでは内側の楼閣にトーラナがないことはSTTSでは明記されていない。この点については森（1997: 283, 294）参照。

(50) STTS「降三世品」の次の部分を指す。

caturaśram caturdvāram aṣṭastambhasatoraṇam // (堀内 1983: 387)

gru bzhi la ni sgo bzhi pa // ka ba brgyad dang rta babs bcas // (TTP, Vol. 4, 243.5.5-6)

(51) Skt. vajrastambhāgrasaṃstheṣu pañcamaṇḍalamaṇḍitam.

STTS「金剛界品」からの引用。該当個所は以下の通り。

vajrastambhāgrasaṃstheṣu pañcamaṇḍalamaṇḍitam // (堀内 1983: 111)

rdo rje ka ba'i nang logs su // zla ba'i dkyil 'khor lngas brgyan la // (TTP, No. 112, Vol. 4, 229.3.4-5).

堀内本ではsaṃstheṣuをsaṃsthenduとする。saṃstheṣuと読むのが適当であろう。この引用文でもsaṃstheṣuである。また「降三世品」にも同じ文章が現れる。saṃsthenduについても同様である。

vajrastambhāgrasaṃstheṣu pañcamaṇḍalamaṇḍitam // (堀内 1983: 387)。

rdo rje ka ba'i gnas mchog tu // dkyil 'khor lnga yis brgyan pa ste // (TTP, Vol. 4, 243.5.6).

(52) 具体的な形態は不明。金剛杵を円の形に変形させて描くということか。

(53) アーナンダガルバのSVUを指す(密教聖典研究会 1987: 48)。密教聖典研究会による同書のサンスクリット・テキストでは、STTSと同じvajrastambhāgrasaṃstheṣu pañcamaṇḍalamaṇḍitamとなっているが、対応するチベット訳(TTP, No. 3339)ではpañcamaṇḍalamaṇḍitamに該当する個所が「五つの月輪によって飾られ」(zla ba'i dkyil 'khor lngas brgyan la)である(TTP, Vol. 74, 13.3.5)。これは密教聖典研究会(1987: 48, fn. 10)においても指摘されている。この読みに対応するサンスクリットは堀内本と同じ°saṃsthendupañca°であったかもしれない。

(54) 著者自身が主張する「金剛杵の形の円」という語句は、経典すなわちSTTSそのものには現れないという意味であろう。前注のようにアーナンダガルバはSTTSの本文を「五つの月輪によって飾られ」と理解しているようであるが、著者はこの説を否定するとともに、STTSにはその典拠が求められないことも意図した記述か。

(55) ここから基準となる大きさは第2のマンダラの門の大きさ、すなわち第1のマンダラの半分の2マートラとなる。

(56) 「外廊(図16-④)まで」を意味する。

(57) <12.5.19>の金剛界マンダラの説明を指す。第3のマンダラは金剛界マンダラに準じて墨打ちされるが、大きさの基準が第2のマンダラとなるため、金剛界の半分の大きさとなる。たとえば第2のマンダラの根本線に内接する円(図16-⑤)は直径が8マートラで、その内側の金剛杵輪(図16-⑥)の太さは0.5マートラ、井桁の形をした柱(図16-⑦)の太さも0.5マートラになる。

(58) 楼閣の外壁にある根本線から外廊までの平行する7本の線を指す。法界語自在マンダラの一番外の楼閣が円で表現されている例は、ラダックのチャチャプリ寺にある(岩宮他 1987: 77)。

(59) 出典不明。この偈の全文はAKSに含まれている。

vartulaṃ sarvato bhadraṃ bāhyacakrasya kārayet /

vastrādho mūlam (Ms. mūlaṃm) ādāya paravastrādhaḥ sūtrataḥ //
bhrāmayet saptavṛttāni sūtramānānatikramāt (Ms. sutramānatikramāt) /
mūlasūtrasya madhye tu tyaktvā dvāradvayāntaraṃ (Ms. dvyāṃtaraṃ) //
sūtram ekaṃ (Ms. eka) pradātavyaṃ koṇasūtradvayāvadhi /
tat sūtraṃ ca maṇḍalasya dvitīyasya ca (Ms. dvitīyasvarṇa) mūlakaṃ //
atoraṇam saniryūhadvāreṇa ca samanvitāṃ /
tasya madhye tṛtīyasya maṇḍalasya ca mūlakaṃ //
dvāradvayaṃ parityajya (Ms. patyajya) sūtraṃ ca (Ma. ja) pātayet tathā /
atoraṇaṃ (Ms. atoraṇā) kapolādidvāraniryūhamaṇḍitaṃ //
asyāpy abhyantare (Ms. atyaṃtare) caiva caturthaṃ maṇḍalaṃ tathā /
vajradhātor yathā garbhena ca koṣṭhaṃ tathātra ca //
śukād bāhye bhaved atra svarṇabhūś caturaṅgulī /
vajrāvalī tathā kāryā ratnāvalī (Ms. ratnāvali) tathā punaḥ //
padmāvalī tathā caiva cakrāvalī (Ms. vajrāvalī) punas tathā /
sthitaiḥ śeṣais tathā bāhye raśmayo dvādaśāṅgulī (Ms. dvāṃdaś°) // (Lokesh Chandra 1974a: 104.5-105.2)
kun nas zlum po bzang po yis // dkyil 'khor phyi rol gyis ni 'khor lo bya //
gos 'og rtsa ba nas bzung ste // pha rol gos kyis 'og nas thig //
thig gi rim pa ma 'das par // zlum po mdun ni bskor bar bya //
rtsa ba'i thig gi nang dag du // sgo gnyis kyis ni par spangs nas //
thig cig rab tu sbyin bya ste // zur thig gnyis kyi par du 'o //
thig de yang ni dkyil 'khor ni // gnyis pa yi yang rtsa ba yin //
rta babs med cing sgo khyud bcas // sgo rnams dang ni mnyam pa ldan //
de yi nang du gsum pa yi // dkyil 'khor gyi ni rtsa ba ste //
sgo gnyis yongs su dor ba nas // thig kyang de bzhin bdab par bya //
rta babs med cing sgo 'gram dang // sgo dang sgo khyud sogs kyis brgyan //
'di'i yang ni nang dag du // dkyil 'khor bzhi pa'ang de bzhin nyid //
rdo rje dbyings kyi nang ji bzhin // de bzhin 'dir yang ri mig dgu'o //
rwa'i phyi rol gyur pa 'dir // gser gyi sa la sor bzhi ste //
rdo rje'i phreng ba de bzhin bya // rin chen phreng ba de bzhin slar //
pad ma'i phreng ba'ang de bzhin nyid // 'khor lo phreng ba slar de bzhin //
lhag ma'i gnas pa la de bzhin du // phyi rol 'od zer sor bcu gnyis // (TTP, No. 5012, Vol. 86, 245.5.4-246.1.1)

(60) <12.5.19>参照。前の「文殊金剛マンダラ」においても同じ表現が現れた。

(61) 金剛界マンダラの墨打ちの方法に準じるが、図18に見られるように、第４のマンダラは第１のマンダラの４分の１の大きさが基準となる。

(62) <12.5.2>参照。

(63) なぜ平行線が３本必要であるのか不明。

(64) <12.5.20>参照。この内院は第３のマンダラの内部と同じ構造を持つ。

(65) 9マートラを12等分するので、ひとつの部分は0.75マートラに相当する。

(66) 根本線の8分の1の大きさが門であるという規定は、一般のマンダラと同じであるが、基準となる小楼閣の根本線の長さは6マートラである。

(67) これらの小楼閣にも、外壁には根本線の外側に外廊までの6本の線が描かれる。<12.5.21>でも「根本線以下の7本」という表現があった。

(68) **図21**に示したように、32マートラの根本線で囲まれた内部に、5つの小楼閣を十字型に配置する。一辺9マートラの小楼閣が中央と左右(あるいは上下)三つ分で27マートラを占め、外の根本線との間にはすでに1.5マートラずつとっているので、残りは2マートラとなり、これを1マートラずつとして、中央と四方の小楼閣との間の大きさとする。

(69) この段落の最後に述べられるように、この場合の「マートラ」は5つの小さい楼閣の大きさを基準にしている。前の段落で小楼閣の一辺は9マートラと規定されているので、マンダラ全体の1マートラに対し、この「マートラ」は16分の3マートラ(=0.1875マートラ)となる。

(70) 根本線の内側に1マートラ幅の金剛杵の帯を作る。金剛杵輪と呼ばれるが、四角形である。以下の4小楼閣でも同様の帯を作り、順にチャクラ、宝、蓮華、剣を、金剛杵の代わりに描く。

(71) あるいは9つの突起のようなものをそなえた形の宝か。

(72) 前のパンチャダーカ・マンダラの小楼閣と同じ方法で根本線を描くが、ここで造られる小楼閣は一辺が8マートラであるため、それを12等分した1部(aṃśa)は3分の2マートラになる。

(73) トーラナについてはとくに言及はないが、前と同様に描かない。

(74) 直前に描いた直径12マートラの円をどのように使い、具体的にどのように正五角形を作るのか、ここからは明らかではない。周囲の五つの小楼閣も一辺が8マートラであるため、円に内接する五角形ではない。また、中心の小楼閣の周囲に一辺8マートラの五角形を作るとすれば、五角形は円からわずかにはみ出すことになる(**図23**)。またその場合、周囲の小楼閣はそれぞれ左右の楼閣に接することになる。あるいは、円に外接するように五角形を描くとも考えられるが、その場合、五角形の一辺の長さは8マートラよりも長くなる。

(75) 小楼閣の墨打ちのために、あらたに小楼閣の梵線を引く。

(76) 前の段落で、中心の小楼閣の根本線と、外廊までの外壁内部の線を引く部分を指す。周囲の5つの小楼閣に対しても、中心の小楼閣と同じように線を引く。なお、チベット訳はサンスクリット・テキストと語順が異なるため、「『線を引け』というところまで」となっている。

(77) 大楼閣と小楼閣のどちらの大きさを指すかは明記されていないが、文脈から小楼閣であることは明らかである。

(78) 「太陽車」については未詳。

(79) 出典不明。

(80) 時輪マンダラの墨打ち法については、森(2000)でその概要を示した。

(81) 第13儀軌「彩色の儀軌」を参照。

(82) この段落に関連する『無垢光』(Vimalaprabhā)の記述は以下の通り。

tatsthānād raṅgabhūmir bhavati dinakaraiś ca trirekhaṃ hi yāvad
dikkoṇeṣv abdhikoṣṭhaiḥ śaśiravikamalāny eva gandhādikānām /
sārdhaikena trirekham bhavati ṛturasair dvāraniryūhakāś ca

tadvatpakṣe kapālaṃ tribhir api ca mahāvedikā stambham ardham // 38 //
tasyārdhe naṣṭakālair bhavati maṇimayā paṭṭikā dvārabhūmiṃ
sastambhaṃ toraṇaṃ syāt triguṇitadaśabhir dvāramūlāditaś ca /
sūtrārdhaṃ mūrdhni varjyaṃ prabhavati bakulī cārdhakārāvasāne
ṣaṭkoṣṭhais toraṇādho vasukamalayutā paṭṭikā yoginīnām // 39 //

brahmasūtrād vāmadakṣiṇapūrvāparam aṅgulārdhadvayaṃ sūtraṃ pātayet / garbhakamalakarṇikā nāyakāsanārthaṃ caturṣu dikṣu dvāreṣu devatāpadmāsanārtham[*1] iti / tato vāmadakṣiṇapūrvāparadikṣu abdhir iti caturardhāṅgulāni kamaladalāni bhavanti / nāyakakamalaṃ śeṣāṇāṃ devatādevatīnām āsanānāṃ triguṇam / evaṃ brahmasthāne arkakoṣṭhair iti dvādaśārdhāṅgulair bhagavataḥ padmam padmatribhāgikā karṇikā caturardhāṅgulā bhavatīti niyamaḥ / dikṣu patramadhye sūtraṃ pātayitvā śeṣaṃ tryardhāṅgulaṃ dvidhā kṛtvā sapādā dvyaṅgulavibhāgena garbhamaṇḍale rekhātrayaṃ bhavati / apareṇa pakṣakaṃ bhavati / tataḥ kamalapatrabāhye ekenārdhāṅgulabhāgena vajrāvalīsthānam / tataś caturbhir ardhāṅgulair devatākamalāni kamalamadhye sūtraṃ pātayitvā pūrvavajrāvalībhagena sārdhaṃ trīṇy ardhāṅgulāni bhavanti / teṣu madhye sūtraṃ dattvā kapolasthāne prākārabhūmitoraṇastambhā bhavanti sārdhasārdhavibhāgeneti / tato buddhāsanād bāhye 'ṅgulārdhena bāhye vajrāvalī bhavati buddhadevīnāṃ madhye / kakṣeśv aṣṭāsanāni ghaṭānāṃ kapālānāṃ vā bhavanti / tryardhāṅgulavibhāgena vāmadakṣiṇena ṣoḍaśasthambhāntare / śeṣaṃ buddhāsanamāneneti / tato vajrāvalyāḥ ardhāṅgulaṃ[*2] bhāgadvayaṃ tyaktvā 'rdhāṅgulena sūtraṃ pātayitvā tataś caturbhir gandhādīnāṃ devīnāṃ ghrāṇādīnāṃ devatānām āsanārthaṃ sūtraṃ pātayet / (Rinpoche 1994: 46-47)

*1 R (inpoche) devatā padmā

*2 R vajrāvalyās tryardhāṅgulaṃ（同書の脚注によれば°vyāḥ ardhā°と読む写本が一本ある）

(83)　1ハスタは50cm前後なので、親指の太さを指しているのであろう。

(84)　この場合の「マンダラ」は身密マンダラの根本線に囲まれた部分を指す。時輪以外のマンダラでは「根本マンダラ」と呼ばれるが、時輪マンダラではこの用語は用いられず、単に「マンダラ」と呼ばれる。つぎの<12.6.3>に「根本線の内側のみが意密マンダラで、口密マンダラも同様である。身密マンダラも同様である」という規定からも、このことはわかる。

(85)　「ヤヴァ」は長さの単位。すでに<12.1.3>で「阿闍梨のヤヴァ」(ācaryayava) が通常のヤヴァよりも若干長く、7ヤヴァが1アングラであるという換算法が示されている。通常のヤヴァは1アングラの8分の1である。

(86)　したがって1ハスタは48マートラとなる。この数値は、身密マンダラの根本線の長さが4ハスタであることからも算出できる。1マートラが門の6分の1という規定は、これまでのマンダラで共通していた門の4分の1という規定とは異なる。

(87)　これらの線は梵線と平行に引くので、このように規定される。

(88)　四仏が位置する蓮華である。

(89)　この部分には尊格は描かれず、東南西北それぞれ別の色が塗られる。

(90) この部分には六大菩薩と六金剛女のシンボルが描かれる。

(91) <12.1.6>を指す。そこでは梵線の左右の根本線を2マートラずつ消して、4マートラの門を作る。

(92) 意密マンダラの根本線の一辺は48マートラであるため、その8分の1となる。時輪以外のマンダラでも門は根本マンダラの一辺の8分の1であるが、根本マンダラの大きさが32マートラであるため、4マートラとなる。

(93) 「パクシャカ」(pakṣaka)という読みの写本がある。

(94) tato 'rdhāṅgulaṃ tyaktvā sārdhāṅgulena prākāratrayaṃ bhavati / evaṃ prākārabhūmer dviguṇā vedikābhumiḥ / vedikārdhena ratnapaṭṭikā dviguṇā hārārdhabhūmiḥ / hārabhūmer ardhā vakulīkramaśīrṣakam*1 / evaṃ dvāratulyaṃ*2 niryūhaṃ niryūhatulyaṃ pakṣakaṃ kapolaṃ ca / tathā dvāramānāt stambhopari triguṇaṃ toraṇam / evaṃ garbhamaṇḍale sūtrapātaniyamaḥ / evaṃ sūtraṃ vai brahmasūtrāt ity ārabhya prabhavati bakulī cārdhahārāvasāne (ch. 3, v. 39) iti paryantaṃ pūrvasūtrapātaḥ / punar maṇḍalārtham aparo dvyabdhyekābdhyeka (ch. 3, v. 54) ity ārabhya toraṇaṃ proktabhāgaiḥ (ch. 3, v. 55) iti paryantaṃ cittamaṇḍale ubhayasūtrapātaḥ prokta iti cittamaṇḍale niyamaḥ / (Rinpoche 1994: 47)

*1 R kavaśīrṣakam

*2 R hāratulyaṃ (同書の脚注によれば、3本の写本はdvāratulyaṃ)

(95) 次に説かれるように、柱は外廊、バクリー、瓔珞半瓔珞、宝の4つの帯と垂直に接しているので、その長さは7.5マートラとなる。

(96) この段落のはじめに説かれる壁の線のうち、根本線から1.5マートラ離れて平行に伸びる部分。

(97) 「対角線からトーラナの柱まで」という意味であろう。

(98) 外廊の線は対角線からカポーラまでで、その間にある18マートラの線は「シリースーチャカ」と呼ばれる。ここで示される門はすでに<12.2.3>で説かれたナーガブッディ所説の門のように、「突き抜け型」の形をしている。各部分のマートラ数は両者の間でことなるが、これは1マートラが時輪マンダラの場合、門の6分の1であるのに対し、時輪以外では4分の1であったためで、実際に描いた形は両者で全く同じである。

(99) idānīṃ mūlatantroktatoraṇalakṣaṇam ucyate / iha toraṇaṃ sarvatra dvāramānāt triguṇam bhavati / tatra cittamaṇḍale 'rdhāṅgulaiḥ ṣaḍbhir dvāraṃ tatas triguṇam aṣṭādaśārdhāṅgulais toraṇaṃ bhavati / tad eva tripuraṃ kārayet / prathamaṃ puram ardhāṅgulaiḥ ṣaḍbhiḥ dvitīyaṃ sārdhacaturbhiḥ tṛtīyaṃ tribhiḥ sārdhaiḥ / tato harmir dvābhyām / dvābhyāṃ kalaśam iti / evam aṣṭādaśabhāgais tripuraṃ toraṇam iti / tatra prathamapure ardhāṅgulavibhāgena stambhopari paṭṭikā dīrghatvena caturviṃśatyaṅgulā / tadupari ardhāṅgulavibhāgena mattavāraṇam dīrghatvena ṣoḍaśārdhāṅgulam / tadupari garbhakarṇikāmānena caturasraṃ madhye pūjādeviṇāṃ sthānam / tasya savyāvasavye ardhāṅgulena stambhaṃ tayoḥ savyāsavyayor devīsthānam / tataḥ punaḥ stambhaṃ savyāvasavye / tayoḥ savyāvasavyaṃ toraṇastambhopari ākrāntagajasiṃhayugalaṃ mūrdhni śirasā darśayet / tayoḥ śira upari adhaḥ paṭṭikārdhabhāge-

na catuḥstambhopari dīrghatvenāṣṭādaśārdhāṅgulā paṭṭikā bhavati / tadupari mūlamattavāraṇavad mattavāraṇaṃ dīrghatvena dvādaśārdhāṅgulam / tadupari pādenārdhāṅgulavibhāgena pratyekastambham / stambhāntarāle tribhis tribhir ardhāṅgulais trīṇi devatāsthānāni cihnasthānāni vā bāhyastambhayoḥ savyāvasavyaṃ śālabhañjikāṃ kuryāt / tayoḥ śira upari catuḥstambhopari punar ardhāṅgulārdhabhāgena paṭṭikā dīrghatvena pañcadaśārdhāṅgulā / tadupari mattavāraṇaṃ pūrvavad ardhāṅgulena dīrghatvenāṣṭārdhāṅgulaṃ tadupari aṅgulārdhārdhavibhāgena pratyekastambhaṃ kuryāt / stambhāntarāntare mūlapuradevatāsthānārdhavibhāgena sthānatrayaṃ tatra bāhyastambhayoḥ savyāvasavyaṃ punaḥ śālabhañjikāṃ kuryāt / tadupari bhāgārdhena paṭṭikā dvādaśārdhāṅgulā / tadupari aṣṭārdhāṅgulā dīrghatvena harmiḥ / tadupari dvābhyāṃ kalaśaṃ savyāvasavyaṃ dhvajadaṇḍasthānam / evaṃ pratyekapaṭṭikāgre cāmarāṇi ādarśaś ca lambamāno dhvajaś ceti toraṇamānalakṣaṇaṃ mūlatantroktam iti /　(Rinpoche 1994: 47-48)

(100)　カーラチャクラ・マンダラの場合、門は6マートラであるため、トーラナの高さはその3倍の18マートラとなる。トーラナが門の3倍の大きさであることは、時輪以外のマンダラでも共通し、すでにVAにおいても何度も言及されている（<12.2.5><12.2.6><12.3.7>）。

(101)　文字通りには「酔象」の意であるが、Monier-Williams (1982) によれば「小塔」(tarret)、Acharya (1978) によれば「長押し」(entabulance) の一種とあり、建築用語であろう。

(102)　したがって「供養女尊の場所」は縦横4マートラの正方形、柱は縦4マートラ横1マートラの長方形となる。

(103)　文字通りには「牙を持つものの王」(dantīndra)。

(104)　**図27**では象と獅子は省略されている。

(105)　サンスクリット写本はいずれも「1マートラ」(mātrikā) であるが、文脈からは「0.5マートラ」でなければならない。チベット訳は「0.5マートラ」(cha chung phyed pa)。

(106)　前出の「女尊の供養の場所」と同じであろう。

(107)　シャーラ樹の樹神。寺院の外壁の装飾などに現れるような女神であろう。

(108)　すでにこのセクションの冒頭で、「ハルミは2マートラ」と規定されているが、それは幅0.5マートラの帯（**図27-㉑**）を含む長さである。

(109)　idānīṃ vāṅmaṇḍalam ucyate

　　ṣaṭkoṣṭhais toraṇādho vasukamalayutā paṭṭikā yoginīnām (39d)

iti / iha vāṅmaṇḍale ye caturvibhāgāś caturdikṣu ṣaḍardhāṅgulātmakāḥ teṣu bhāgadvayena garbhamaṇḍalaprākāravedikā ratnapaṭṭikā hārārdhahārabakulīkramaśīrṣāṇi patitāni / śeṣaṃ bhāgadvayaṃ tiṣṭhati / tayor ekabhāgaṃ tyaktvā aparabhāgaṣaṭkoṣṭheṣu adha ūrdhvaṃ koṣṭham ekaikaṃ varjayitvā madhye caturvibhāgair yoginīnām aṣṭakamalapaṭṭikā sarvadikṣu koṇeṣu padmāni / toraṇādho dikṣu dvitīyapure mattavāraṇaṃ caturardhāṅgulamātraṃ bhañjayitvā yoginīnāṃ kamalaṃ kuryāt / stambhayugmam apasārayitvā 'rdhāṅgulārdhamātram / devatīnām abhāve punaḥ pūrvoktalakṣaṇam / tenaiva lakṣaṇena bāhye vāṅmaṇḍale sarvaṃ dviguṇaṃ bhavati dvārād ārabhya toraṇāntam iti niyamaḥ // 38-39 //　(Rinpoche 1994: 48)

(110) これはすでに説明した幅12マートラの意密マンダラの外壁部のことである。

(111) 「尊格の帯」の上には四方と四隅にひとつずつ8つの蓮華があり、八母神と六十四ヨーギニーが乗る。

(112) 四方の蓮華は意密マンダラのトーラナの2段目の中央に位置する。この部分は左右が2本の柱に囲まれた一辺3マートラの正方形であるため、直径4マートラの蓮華を描くことができない。そのため、四方の蓮華は柱のために0.5マートラずつ内側にずらして(つまり、小さくして)、直径3マートラの蓮華を代わりに描くという指示であろう。

(113) 口密マンダラの根本線になる。

(114) 基本的に口密マンダラは意密マンダラの2倍、身密マンダラは口密マンダラの2倍の大きさを持つ。ここでは口密マンダラの楼閣の壁の説明で、門が12マートラ、根本線からトーラナの下の端まで(楼閣の壁の厚さに相当)が24マートラ、トーラナの高さは36マートラとなる。

(115) idānīṃ kāyamaṇḍalam ucyate

tasmāt śrīraṅgabhūmī rasaguṇitayugaiḥ pañcarekhāṃ hi yāvat
dikkoneṣv arkapadmaṃ dviguṇam anudalaṃ sūryakoṣṭhaiḥ prakuryāt /
garbhadvāraṃ dviguṇyaṃ trividhaguṇavaśād dvāram apy atra bāhyaṃ
prākārādyaṃ tathaiva trivalayaracanāṃ tryaṣṭakaiś ca prakuryāt // 40 //

tasmād ity ādinā / iha kāyamaṇḍale caturdikṣu ye caturbhāgā dvādaśārdhāṅgulātmakāḥ teṣu bhāgadvaye vāṅmaṇḍalaprākāravedikāratnapaṭṭikāhārārdhahāravakulīkramaśīrṣāṇi patitāni / śeṣaṃ bhāgadvayaṃ tiṣṭhati / tasmād vāṅmaṇḍalāntāt śrīraṅgabhūmī rasaguṇitayugair iti / caturviṃśadbhir ardhāṅgulair bhavati pañcarekhāṃ hi yāvad iti niyamaḥ / dikkoṇeṣu tatra maṇḍale arkapadmam iti dvādaśapadmāni dviguṇam anudalam iti / aṣṭāviṃśatidalāni / sūryakoṣṭhair dvādaśārdhāṅgulabhāgair iti / tāni dvādaśārdhāṅgulāni saptavibhāgaṃ kṛtvā madhyabhāgena karṇikādvitīyasavyāvasavyabhāgena caturdalam / tṛtīyasavyāvasavyenāṣṭadalāni / caturthasavyāvasavyena ṣoḍaśadalāni / evam aṣṭaviṃśaddalāni kuryād iti / evaṃ garbhadvāraṃ tamoguṇavaśāt / tasmān madhyamaṇḍaladvāraṃ rajoguṇavaśād dviguṇam tasmāt sattvaguṇavaśāt kāyamaṇḍaladvāraṃ caturguṇam iti / evaṃ prākārādyaṃ toraṇādyaṃ trivalayaracanodakatejovāyuvalayaracanāṃ tryaṣṭakaiś ceti caturviṃśadbhiḥ prakuryāt // 40 // (Rinpoche 1994: 48-49)

(116) 12の護方神を中心に28尊12組の女尊を置く蓮華である。

(117) ここでは28弁の蓮華を作るために直径12マートラの蓮華を等間隔の4重の同心円に分け、第2重に4弁、第3重に8弁、第4重に16弁の蓮弁を作る。この文章の「マンダラ」は4重の同心円の第2重から第4重の部分を指す。

(118) この「尊格の帯の線の・・・2倍の大きさになる」という部分は、すでに<12.6.6>にほぼ同じ表現があった。ここではマンダラの名称と大きさのみを変更している。

(119) 身密マンダラのトーラナの高さは72マートラとなり、その先端は外周部の水輪の帯のちょうど中間にまで達する(**図29**参照)。

(120) 12マートラというのは戦車の長さであろう。門の大きさは24マートラなので、その半分を占める。

(121)　teṣām ādyantabhāge raviśaśivalayaṃ bāhyavajrāvalīṃ ca
kuryāt koṣṭhais tadardhair yad anilavalaye maṇḍalānte ca cakram /
stambhādho maṇḍalaṃ ca prabhavati phaṇināṃ syandanaṃ devatīnāṃ
sūryaiś ca dvāramadhye nabhasi bhuvitale pūrvabhāge 'pare ca // 41 //
teṣāṃ trivalayānām ādibhāge raviśaśyudayavalayaṃ kuryāt / arkakoṣṭhair dvādaśabhir iti teṣām ante vajrāvalīṃ kuryād dvādaśabhiḥ / caturviṃśadbhir vajrārcir iti / tatra yad dvārāntacakraṃ tadvāyvagnivalayamadhye pratyekam aṣṭāraṃ dvādaśabhir iti / bāhyamaṇḍalastambhādho vedikāyām āsanaṃ phaṇināṃ vāyvādimaṇḍalaṃ dvādaśabhiḥ / syandanaṃ dvāramadhye dvādaśabhiḥ / tatraiva vāṅmaṇḍale toraṇaṃ dvādaśāṅgulaṃ varjayitvā dvitīye dvārasyārdhe syandanaṃ kuryād indrādidevatāpaṭṭikātulyam / pūrvāparaṃ toraṇakalaśaṃ varjayitvā ākāśapātālarathaṃ darśayet kāyamaṇḍale / iti maṇḍalasūtrapātaniyamaḥ // 41 //　(Rinpoche 1994: 49)

(122)　<12.6.2>で示したように、身密マンダラの根本線の長さは4ハスタで、その2倍の8ハスタは地輪の内側の円の直径に相当する。

(123)　この段落で説かれる第2の説の時輪マンダラは、これまでのマンダラの3倍の大きさを持つ。そのため、これまで6マートラであった意密マンダラの門が18マートラとなるが、これを同じ6つに分割し、一つの単位を「マートラ」の女性形である「マートラー」と呼ぶ。1マートラーは3マートラに相当するので、これまでと同じ数値で、マンダラを説明することができる。

(124)　<12.2.8>までで説かれた第1の説の場合、一番外側の身密マンダラの根本線の長さは4ハスタであった（<12.6.2><12.6.3>参照）。ここではその3倍の大きさのマンダラが説かれることになる。

(125)　一番外側の楼閣の根本線の長さの2倍が、マンダラの地輪までの長さとなっていることは、つねに一定している。

(126)　第3の説は意密マンダラと口密マンダラの主尊を入れ替えたものである。それ以外の尊格の位置には変更は加えられない。大きさは第1の説のマンダラの4倍となる。

(127)　第2の説と同様、第1の説の5倍の大きさのマンダラを説明するために、新しい基準としてマートラーを用いる。ここでは1マートラーが5マートラに相当する。

(128)　第4の説は意密マンダラと身密マンダラの主尊を入れ替えたものである。以上の第2説から第4説までは、順に第1の説のマンダラの3倍、4倍、5倍の大きさを持つ。最大の第4の説のマンダラの場合、地輪の内側の直径が40ハスタで、最外周の火炎輪の直径は65ハスタとなる。これは1ハスタを50cmで換算した場合、32.5mにもなる巨大なマンダラである。

(129)　この場合の「本初仏」(ādibuddha) が具体的に何を指すのか不明。<12.3.9>との関係からすれば、意金剛、口金剛、身金剛と呼ばれる仏たちになるのであろう。チベット訳は「本初仏より」(dang po'i sangs rgyas las)。

(130)　『無垢光』第3品「灌頂品」第1章「金剛阿闍梨等などのすべての儀礼行為の成就のあり方に関する大いなる教え」に含まれる以下の記述による（イタリック体がVAの引用に対応する箇所）。

sūtraṃ hastāṣṭakaṃ syād bhavati karanavaikena vṛttaṃ trivṛttaṃ
ācāryāṅguṣṭhakena trividhapathagataṃ sūtram ekaṃ na cānyat /　(ch. 3.19ab)　...

tad evāṣṭahastam iti maṇḍalasya dviguṇaṃ caturguṇaṃ vā ṣoḍaśahastaṃ yāvat ācāryahastena sūtram ekaṃ kartavyam / na cānyad lakṣaṇaṃ maṇḍale / maṇḍalaṃ sadā svātmavibhāgena ekahastam ārabhya yāvat sahasrahastaṃ tāvad bhavati tena sūtaniyamo maṇḍalaniyamaś cācāryahastena yatra tatra dviguṇaṃ sūtraṃ maṇḍalād iti / *tatrādibuddhe cittamaṇḍalaṃ dvādaśahastaṃ prakuryād* iti niyamāc caturviṃśatihastaṃ sūtram / evaṃ vāṅmaṇḍalaṃ ṣoḍaśahastam kāyamaṇḍalaṃ viṃśatihastam iti niyamaḥ sūtradviguṇatāyāḥ* / (Rinpoche 1994: 17).

* Rinpocheの脚注によればprakuryādをkuryādと読む写本がいくつかある。これはVAの引用文中の読みに一致する。

チベット訳は以下の通り。

thig skud gru ni brgyad par 'gyur te sum sgril slob dpon gyi ni lag pa'i mthe bo'i nas gcig gis //

sboms su 'gyur ba rnam pa gsum gyi la'am na gnas pa thig skud gcig ste gzhan pa ma yin no // (KCT, TTP, Vol. 1, 143.4.7-8) ...

de nyid ni khru brgyad ces pa dkyil 'khor gnyis (P. nyid) ldab bam / bzhi ldab khru bcu drug gi bar du slob dpon gyi khru yis thig skud gcig bya'o // dkyil 'khor la mtshan nyid gzhan pa ma yin no // dkyil 'khor ni rtag tu rang gi bdag nyid kyi cha yis khru gcig nas brtsams te khru stong ji srid ba de srid du 'gyur ro // des na gang du thig skud kyi nges pa dang dkyil 'khor gyis nges bslob dpon gyi khru yis yin pa der thig skud ni dkyil 'khor las nyis 'gyur ro // de la dang po'i sangs rgyas kyi thugs kyi dkyil 'khor ni khru bcu gnyis pa rab tu bya'o // zhes pa'i nges pas thig skud khru nyi shu rtsa bzhi'o // de bzhin du gsung gi dkyil 'khor grub bcu drug pa dang / sku'i dkyil 'khor khru nyi shu pa'o zhes pa ni nges pa ste / thig skud ni de dag gis nyis 'gyur ro // (Kalki Mahāpuṇḍarīka, *Vimalaprabhā nāma mūlatantrānusāriṇīdvādaśasāhasrikā-laghukālacakratantrarāja-ṭīkā*, TTP, vol. 46, 221,3,7-4.2).

ここで示されている12、16、20ハスタの各マンダラの大きさが、前の段落で述べた第2説から第4説に相当する。また、その前に示される8ハスタの糸によるマンダラが第1の説になる。

(131) 出典不明。地輪以下の6重の円を描かないという規定であろう。

(132) *Trailokyavijayamahākalparāja* (TTP, No. 115) と考えられるが、該当個所不明。

(133) 該当する文献は不明。

(134) 実際、時輪マンダラでは身口意の三つのマンダラの門は、いずれもマンダラ(根本線の長さ)の8分の1である。

(135) 出典不明。

(136) 出典不明。

(137) マンダラの方位を確定するために、魚に似た形の図形を描き、その両端を「魚の尾と頭」と呼ぶ。<12.1.5>参照。

(138) 「方角」(diś) は4を表すので、7つの方角は28(=7×4)となり、これに門の大きさである4マートラを加えて32マートラとなる。ここで説明されているマンダラは、時輪マンダラ以外の一般的な形態を持つマンダラである。

(139)　この部分は根本線の長さの規定である。<12.1.6>の終わりと<12.1.7>のはじめの部分に対応している。そこでも根本線の長さは1ハスタとして説明された。

(140)　32マートラの8分の1であるので、4マートラになる。

(141)　マンダラの長さの基準であるマートラの規定。「マートリカー」と呼ぶのは韻律の関係であろう。

(142)　ヴェーディーは図30の②⑫③で囲まれた部分。

(143)　外壁と門の周囲の線については<12.2.1>でくわしく説明されている。

(144)　<12.2.5>のはじめの段落で説かれた第1のタイプのトーラナ。

(145)　<12.2.5>の第2段落で説かれた第2のタイプのトーラナ。

(146)　「矢」(iṣu) は5を表すので5.5マートラとなる。

(147)　トーラナの柱に接する水平の線は、マンダラの外側の線に重なるため、線ではなく帯(paṭṭi) の長さを規定する。幅2.5マートラ、高さ1マートラの部分を指す。

(148)　「季節」(ṛtu) は6を表す。

(149)　「ルドラ」(rudra) すなわちルドラ神群は11からなる。

(150)　第5と第7の層は、それぞれの上下の層よりも短いため、左右の端を示す垂直の線を引く位置を指定する必要がある。<12.2.5>参照。

(151)　「ヴェーダ」(veda) は4を表す。

(152)　トーラナの上には法輪と金剛杵の鈷のために4マートラ必要で、その外側に火炎輪の内周の線が引かれる。そこからは蓮弁、金剛杵輪、火炎輪の3層があり、順に2、2、4マートラの幅となる。<12.2.7>参照。

(153)　図30では⑩⑪⑰などで囲まれた部分。<12.2.1>では「マンダラとトーラナの中間部分」と呼ばれ、「アンダパッティカー」「アンダカーラパッティカー」「ポーリー」などの名称も紹介されていた。この一文はナーガブッディ所説の門の説明。<12.2.3>参照。

(154)　この規定はすでに<12.3.4>に、また関連する規定が<12.3.7>にある。

(155)　ナーガブッディ所説の門の場合、ヴェーディーの上の線に垂直に接するカポーラは4マートラ、トーラナの柱の両側の線は5マートラである。

(156)　第3のタイプのトーラナ。高さが12マートラではなく4マートラ。<12.3.4>参照。

(157)　トーラナの11の層の厚み（高さ）を示す。財 (vasu)、太陽 (sūrya)、ジナ (jina) はそれぞれ、8分の1、12分の1、24分の1となり、マートラを基準にすれば、2分の1マートラ、3分の1マートラ、6分の1マートラとなる。

(158)　サンスクリット・テキストはいずれも「4.5マートラ」ではなく、「2.5マートラ」である。ただし、Ms. Bのみは「4.5マートラ」という読みに訂正している。チベット訳は「4.5マートラ離れ」(cha chung phyed dang lnga dor nas)。<12.3.4>の規定も4.5マートラで、ここでもその読みに従う。「4.5マートラ離れ」のサンスクリット・テキストが sārdhacaturmatrikāntarāt であったとすると、音節が一つ余計になる。

(159)　3.5マートラではなく2.5マートラとする写本がいくつかある。

(160)　第4と第5の線に関してMss. B Cは以下のような異なる読みを示す。「第4［の線］は4マートラの端から5［マートラ］、第5［の線］は3マートラの端から3マートラ」これは<12.3.4>の規定とも合致しない。

(161) <12.3.4>の訳注でも指摘したように、第3のタイプのトーラナに関して、Ms. Eはいくつかの線について独自の読みを示した。ここでも同様の内容を持ち、その点に関してはこの写本は一貫している。

(162) トーラナの外側から外周部にかけての説明。<12.7.2>と同じ。

(163) ジュニャーナパーダ流のマンダラの楼閣内部の墨打ちの説明が始まる。<12.5.1>に対応。金剛杵輪と火炎輪のために3重の同心円を描くことについては<12.5.1.1>の本文と訳註を参照。

(164) **(外の円の外側で、そこから1マートラ離れて[さらに]外の円)**

Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 13.2.6-7. [NRC 115.3]

'od zer nga yis rnam brgyan pa'i // rdo rje'i phreng ba gsal bar bya //

(165) <12.5.12.2>では一番最後の円の線はその前の円から数えて2.75マートラ内側に引くように説かれていた。これは大楽輪の内側に0.25マートラの円を描くためである。ここでは大楽輪は直径8マートラの一重の円で囲まれるため、蓮弁が2マートラ、花芯の直径が4マートラになり、<12.5.12.2>の規定と一致しない。これまでのマンダラでは一般に、蓮華を描くときには連弁の大きさと花芯の直径が一致するようにすみうちされてきたが、ここでは1:2となっている。<12.5.12.2>では大楽輪の内側に0.5マートラ離れて円を引くという説も紹介されているが、それとも一致しない。

(166) **(梵線と対角線以外の線はない・・・円と輻以外の線は消す)**

ツォンカパはこの一節をそのまま引用した上で、前の註で述べた蓮華の大きさについての不一致を指摘する。さらにヴィブーティチャンドラがVAのこの偈をそのまま引用していることに触れる[NRC 116.2]。ヴィブーティチャンドラによるマンダラ儀軌の該当個所は以下の通り。

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 79.3.1-6.

tshangs dang zur thig gnas pa las // gzhan min de yi tshangs las phyir //
cha chung gnyis dor rtsa ba'i bar // thig gdab zur gyi 'gram dag tu //
de bzhin lte ba'i logs dag las // sgo ni bzhi bzhi de yi srid //
lte ba'i phyi ru cha chung bzhi // dor bar cha chung bzhi pa'i thig //
thad kar tshangs dang zur la gnas // 'dir ni yang ni thig lnga yang //
cha chung gnyis gnyis dor bar ro // de bzhin de rnams dang drug pa //
mtshams su yang dag son pa la'o // tshangs pa dang ni zur thig gis //
g'yas dag g'yon pa'i bdun rnams las // lnga pa gsum pa dang po yis //
cha chung gcig gi mtha' las 'thon // rang gi gnyis pa'i rtser song nas //
bdun pa yi ni dbus su song // thig gcig kyog po lnga ru 'gyur //
de'i nang du 'ang cha chung phyed // dor nas de bzhin gzhan yin no //
tshangs pas rigs bzhin rgyal po dang // nyi klu chu mig cha chung ni //
dor bar zlum po'i thig lnga'o // dang po gsum gyi nang du yang //
cha chung phyed phyed dor nas thig // zlum po gsum po rtsibs zlum gyi //
thig las gzhan ni dbyi bar bya //

略　号

AKS　*Ācāryakriyāsamuccaya.*

AM　*Āmnāyamañjarī: Śrīsampuṭatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī* by Abhayākaragupta.

BHSD　F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 2 vols., Delhi, Motilal Banarsidass, 1970 (1953).

Ms(s).　Manuscript(s)

NRC　*sNgags rim chen po* by Tsong kha pa blo bzang grags pa.

Skt.　Sanskrit

SM　*Sādhanamālā*

STTS　*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra.*

SVU　*Sarvavajrodaya: Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajrodaya* by Ānandagarbha.

Tib.　Tibetan

TTP　Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Tokyo, Suzuki Foundation.

VA　*Vajrāvalī nāma maṇḍalopāyikā* by Abhayākaragupta.

VDT　*Vajraḍākatantra: Śrīvajraḍāka nāma mahātantrarāja.*

文　献

サンスクリット文献

Ācāryakriyāsamuccaya, facsimile edition reproduced by Lokesh Chandra, Śata-piṭaka Series, Vol. 237, New Delhi, International Academy of Indian Culture, 1977.

Kālacakratantra (KCT). ed. by S. Rinpoche 1994.

Pañcakrama, ed. by de la V. Poussin, Gand, Universite de Gand, 1896; ed. by K. Mimaki and T. Tomabechi with facsimile edition of Sanskrit manuscripts, Tokyo, The Centre for East Asian Cultural Studies, 1994.

Vimalaprabhā, ed by S. Rinpoche, 1994.

Sarvatathāgatatattvasaṃgraha (STTS), 堀内 (1974, 1983).

Sarvavajrodaya (SVU), 密教聖典研究会 (1986, 1987).

チベット語文献

(1) 仏説部 (bKa' 'gyur)

Trailokyavijayamahākalparāja, TTP, No. 115, Vol.5, 61.1.1-83.1.1.

Śrīvajraḍāka nāma mahātantrarāja (VDT), TTP, No. 18, Vol. 2, 93.2.7-1445.3.5.

Sarvatathāgatatattvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra (STTS), TTP, No. 112, Vol. 4, 217.1.1-283.2.2.

(2) 論疏部 (bsTan 'gyur)

Abhayākaragupta, *Śrīsaṃpuṭatantrarājaṭīkā-āmnāyamañjarī* (AM), TTP, No. 2328, Vol. 55, 105.1.1-249.1.6.

Avadhūta Śrīmaj Jagaddarpaṇa, *Vajrācāryakriyāsamuccaya*, TTP, No. 5012, Vol. 86, 22 2.5.7-322.1.5.

Ānandagarbha, *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajrodaya* (SVU), TTP, No. 3339, Vol. 74, 1.1.1-25.2.8.

Kalki Mahāpuṇḍarīka, *Vimalaprabhā nāma mūlatantrānusāriṇīdvādaśasāhasrikā-laghu kālacakratantrarāja-ṭīkā*, TTP, No. 2064, Vol. 46, 121.1.1-335.1.6.

Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*『マンダラ儀軌四百五十頌』, TTP, No. 2728, Vol.65, 35.3.6-44.1.2.

Jayabhadra, *Śrīcakrasaṃvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 274.4.8-288.2.5.

Tathāgatavajra, *Śrīsaṃvaramaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2226, Vol. 52, 74.1.7-85.5.3.

Nāgabodhi (Nāgabuddhi), *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*『秘密集会マンダラ儀軌二十』, TTP, No. 2675, Vol. 62, 12.1.4-18.3.6.

Buddhaguhya, *Dharmamaṇḍalasūtra*, TTP, No. 4528, Vol. 81, 107.1.1-110.4.5.

Śākyamitra, *Kosalālaṃkāratattvasaṃgrahaṭīkā*, TTP, No. 3326, Vol. 70, 189.1.1-Vol. 71, 94.2.6.

(3) 蔵外文献

Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa, "gSang ba kun gyi gnad rnam par phye ba"* (*sNgags rim chen mo*), TTP, No. 6210, Vol. 161, 53.1.1-226.2.7.

二次文献

岩宮武二(写真)、石黒　淳・頼富本宏(解説)　1987　『ラダック曼荼羅』岩波書店。

北村太道、ツルティム・ケサン　2001　「マンダラの作成についての研究：ツォンカパ著『秘密道次第大論』試訳(6)」『種智院大学密教資料研究所紀要』4: 43-68。

北村太道、ツルティム・ケサン　2002　「マンダラの作成についての研究：ツォンカパ著『秘密道次第大論』試訳(7)」『種智院大学密教資料研究所紀要』5: 33-63。

田中公明　1987　『曼荼羅イコノロジー』　平河出版社。

田中公明　2001　「胎蔵大日八大菩薩と八大菩薩曼荼羅の成立と展開」『密教図像』20: 1-15。

種村隆元　2002　「インド密教における pratiṣṭhā 儀礼の意味：9種類の灌頂に関するAbhayākaraguptaの議論」『東方学』106: 1-13。

西岡祖秀　1983　「『プトン仏教史』目録部索引III」『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』6: 47-201。

堀内寛仁　1974　『初会金剛頂経の研究(下)』高野山大学密教文化研究所。

堀内寛仁　1983　『初会金剛頂経の研究(上)』高野山大学密教文化研究所。

松長恵史　1999　『インドネシアの密教』法蔵館。

密教聖典研究会　1986　「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya：梵文テキストと和訳(I)」『大正大学綜合仏教研究所年報』8: 24－57。

密教聖典研究会　1987　「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya：梵文テキストと和訳(II)完」『大正大学綜合仏教研究所年報』9: 13-85。

森　雅秀　1991　「インド密教における建築儀礼：*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳（1）」『名古屋大学文学部研究論集』113: 53-73。

森　雅秀　1996　「マンダラの形態の歴史的変遷」立川武蔵編『マンダラ宇宙論』法蔵館、pp. 101-124。

森　雅秀　1997　『マンダラの密教儀礼』春秋社。

森　雅秀　2000　「時輪マンダラの墨打ち法」『高木訥元博士古稀記念論集　仏教文化の諸相』山喜房仏書林、pp. 345-364。

森　雅秀　2001　「『ヴァジュラーヴァリー』所説のマンダラ：尊名リストおよび配置図」『高野山大学密教文化研究所紀要』14: 1-117。

森　雅秀　2004　「『ヴァジュラーヴァリー』「墨打ちの儀軌」和訳（上）」『金沢大学文学部論集　行動科学・哲学編』24: 71-117。

Acharya, P. K.　1978 (1927)　*A Dictionary of Hindu Architecture: Treating of Sanskrit Architectural Terms with Illustrative Quotations from Śilpaśāstra*. General Literature and Archaeological Records. Bhopal: J. K. Publishing House.

Lokesh Chandra (reproduced)　1977a　*Kriyāsamuccaya*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 237. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Lokesh Chandra (reproduced)　1977b　*Vajrāvalī: A Sanskrit Manuscript from Nepal Containing the Ritual and Delineation of Maṇḍalas*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Monier-Williams, M.　1982 (1899)　*A Sanskrit English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press

Mori, M.　1993　Ratnākaraśānti's Sādhana Literature. *Studies in Original Buddhism and Mahāyana Buddhism in Commemoration of Late Professor Dr. Fumimaro Watanabe* (Ed. by Egaku Mayeda) 2 vols. Kyoto, Nagatabunshodo, 1993, pp. 131-152 (Vol. 1).

Poussin, Louis de la Vallée　1896　*Pañcakrama*. Gand: Universite de Gand.

Rinpoche, Sambhong　1994　*Vimalaprabhāṭīkā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratantrarāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. 2. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

付　記

本稿脱稿後、本稿の主題である「マンダラの墨打ち」に関する以下の二篇の論文が発表された。

田中公明　2004　「Nāgabodhi の Śrī-guhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśati-vidhi における曼荼羅の度量法」『密教図像』23: 26-39。

松尾　力　2004　「Kriyāsaṃgraha 所説の金剛界マンダラについて：抨線儀軌を中心として」『密教図像』23: 51-68。

いずれもマンダラの墨打ちに関する基本的なテキストの研究と解説からなり、インド密教のマンダラの実態を解明する上での重要な成果である。

<キーワード>　ヴァジュラーヴァリー、アバヤーカラグプタ、マンダラ、墨打ち

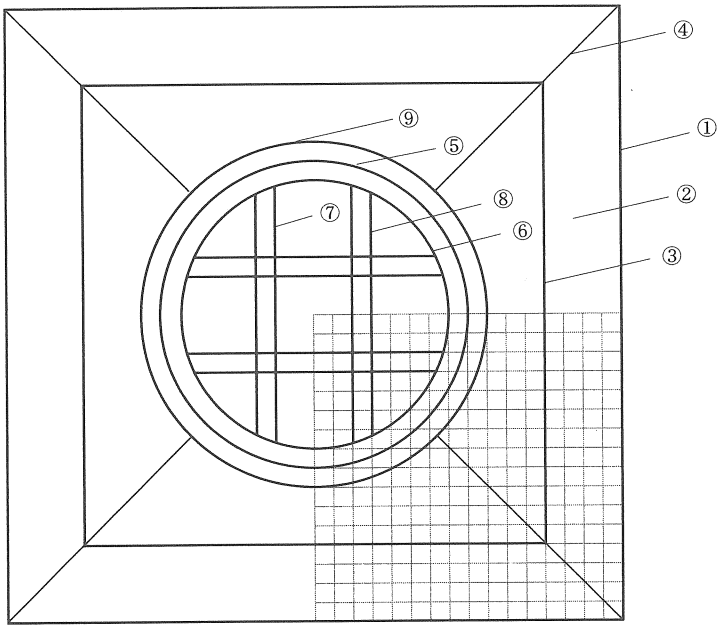

図1　　文殊金剛マンダラ

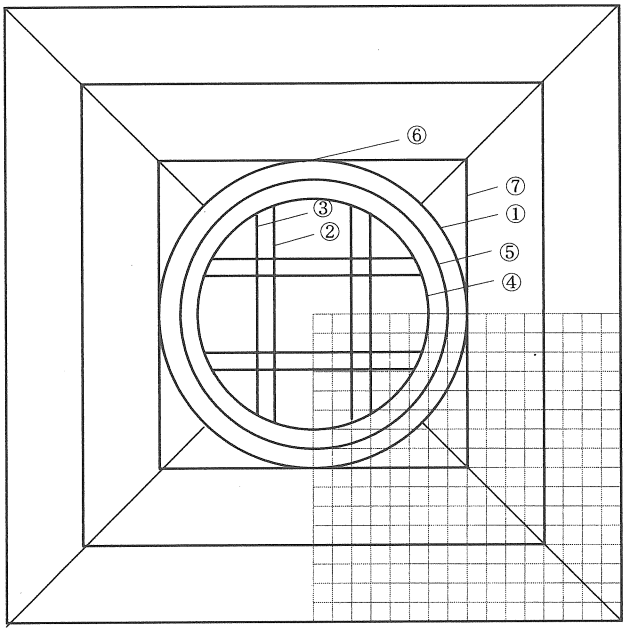

図2　　『ピンディークラマ』所説のマンダラ

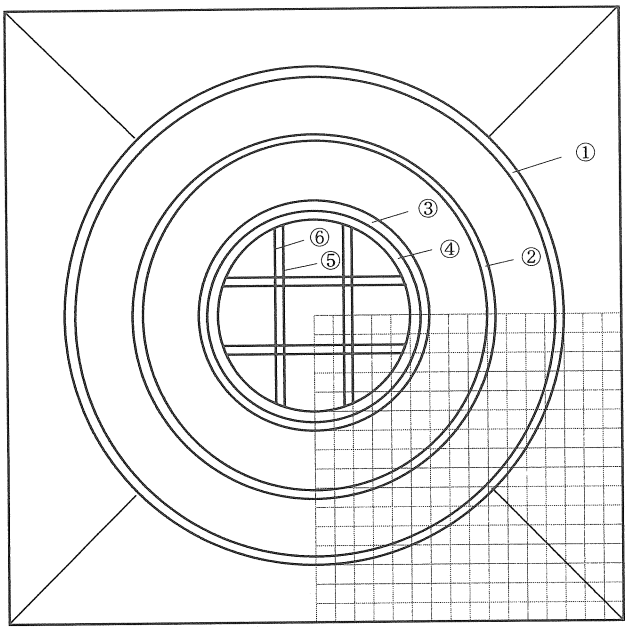

図3　『サンプタタントラ』所説の金剛薩埵マンダラ

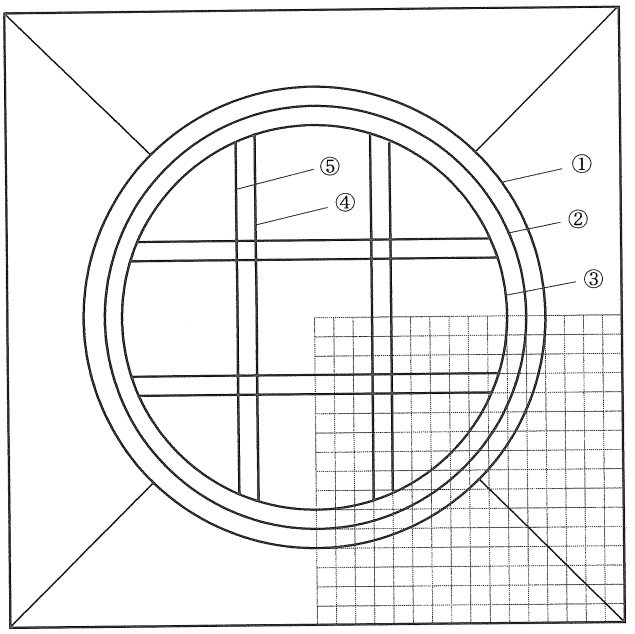

図4　ジュニャーナダーキニーマンダラ

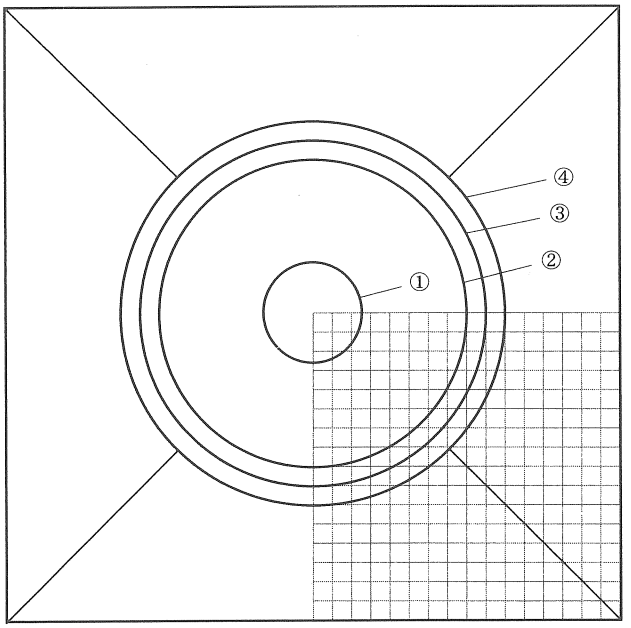

図5　　ヘーヴァジュラマンダラ（17尊）

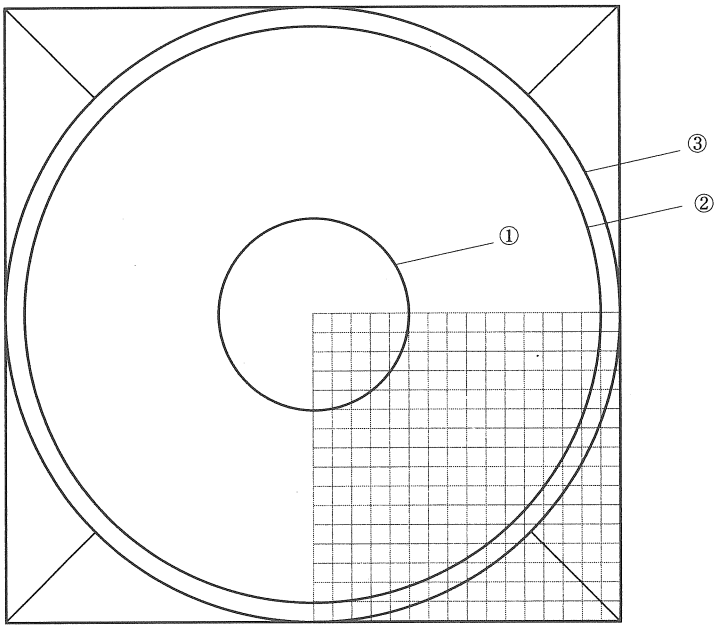

図6　　ヘーヴァジュラマンダラ（9尊）

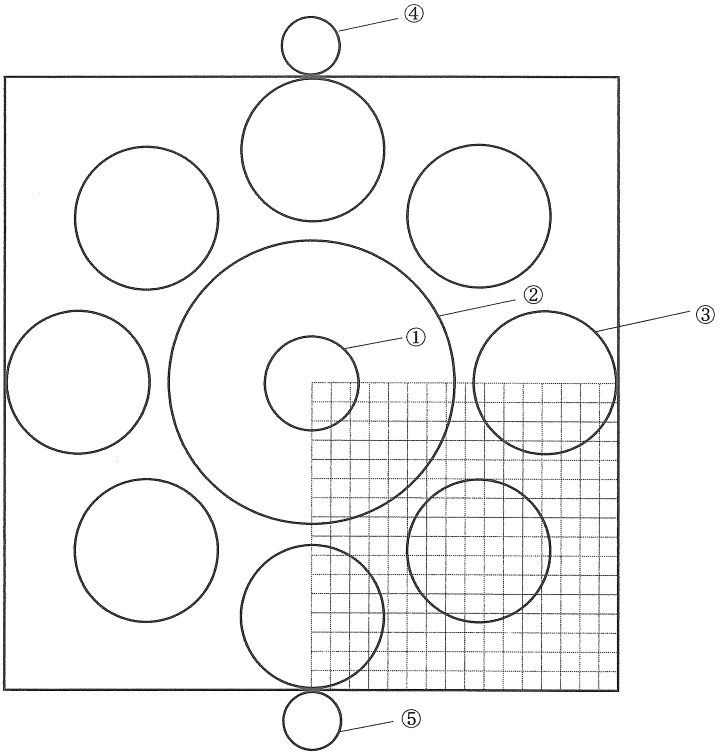

図7　　ヴァジュラフーンカーラマンダラ

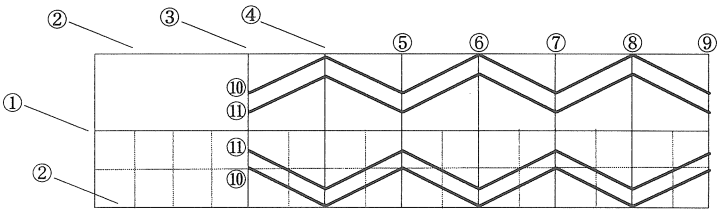

図8　　サンヴァラマンダラの輻の部分

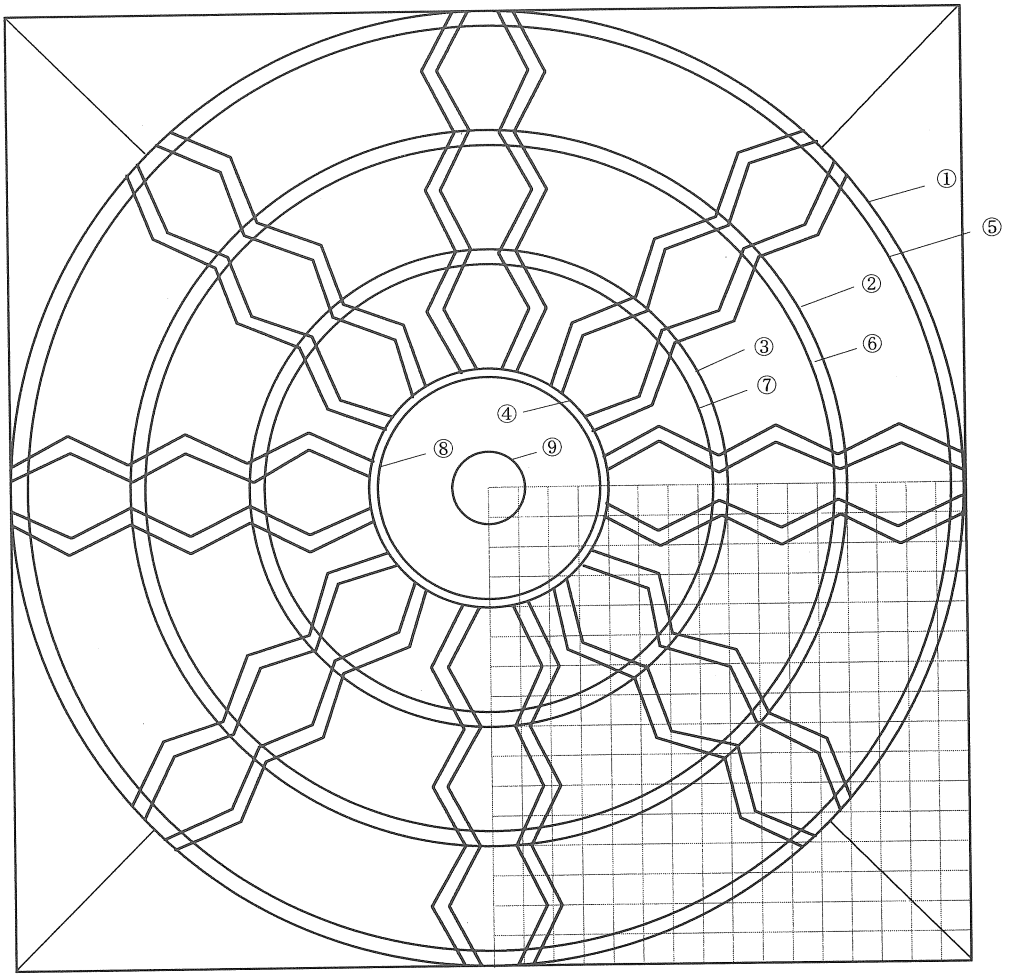

図9　サンヴァラマンダラ

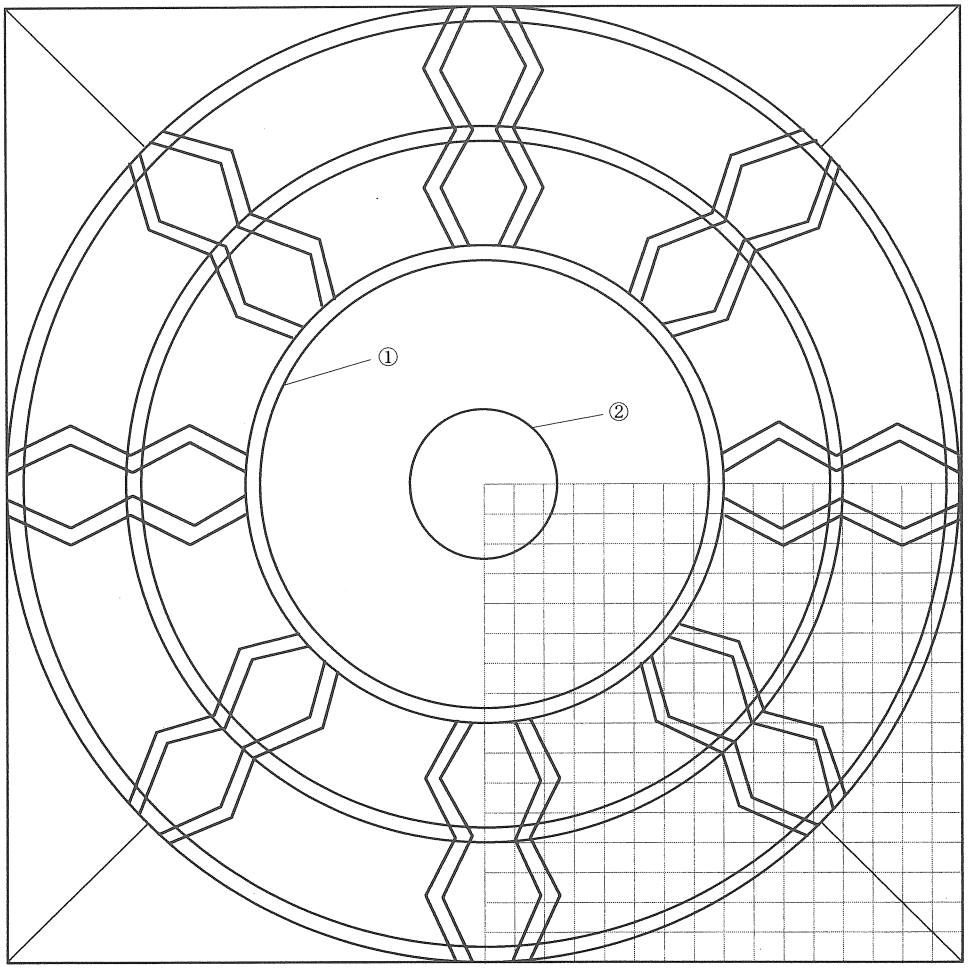

図10　　ブッダカパーラマンダラ

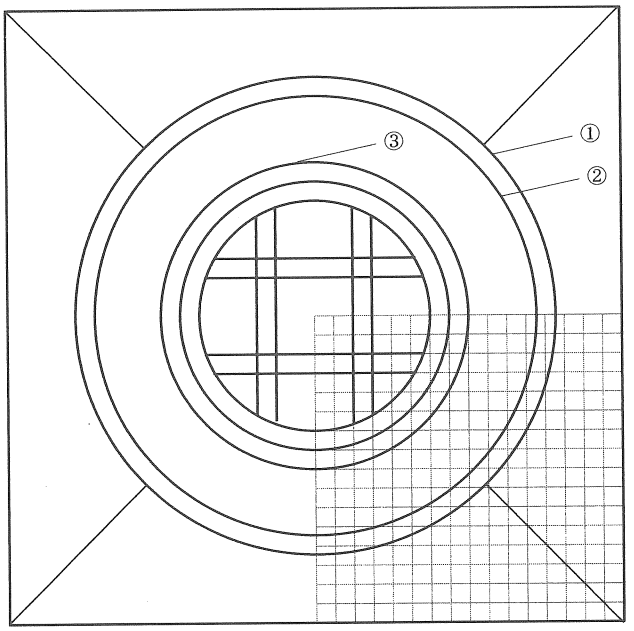

図11　ヨーガーンバラマンダラ

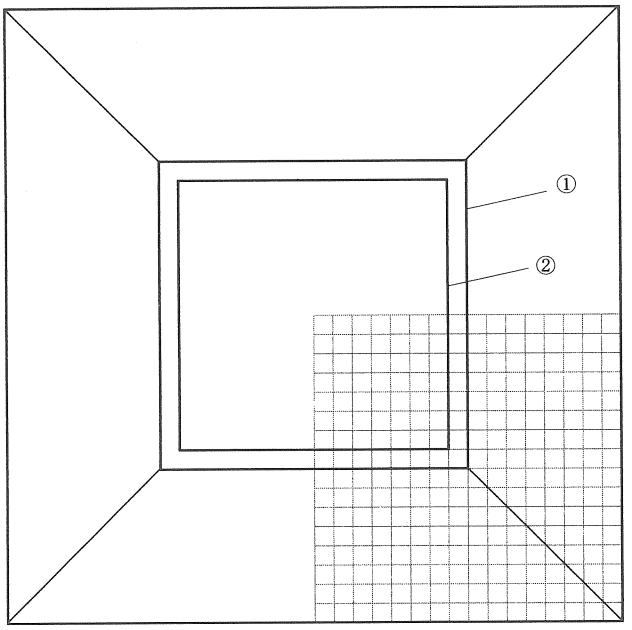

図12　ヤマーリマンダラ

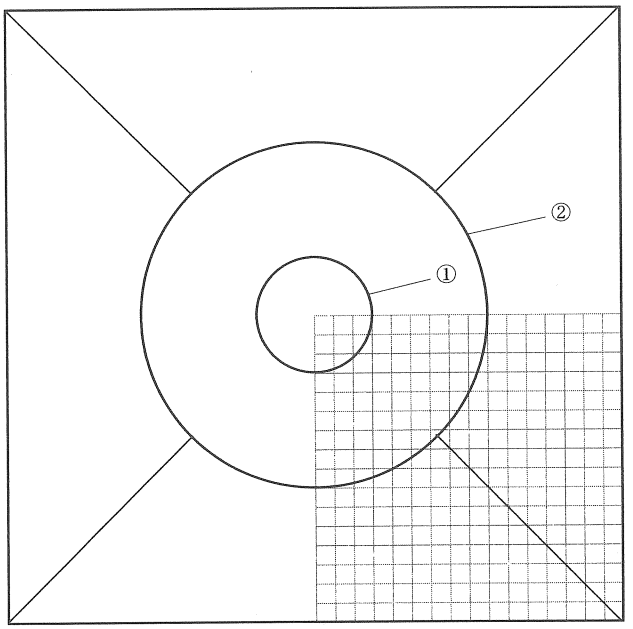

図13　　金剛ターラーマンダラ

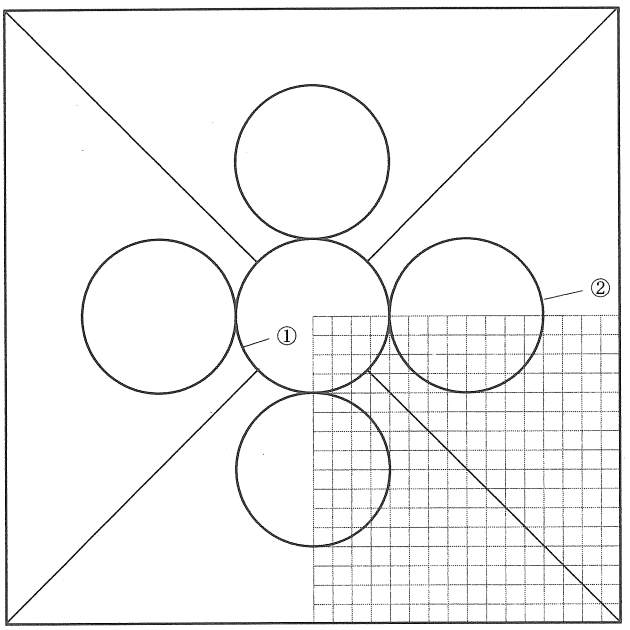

図14　　五守護マンダラ

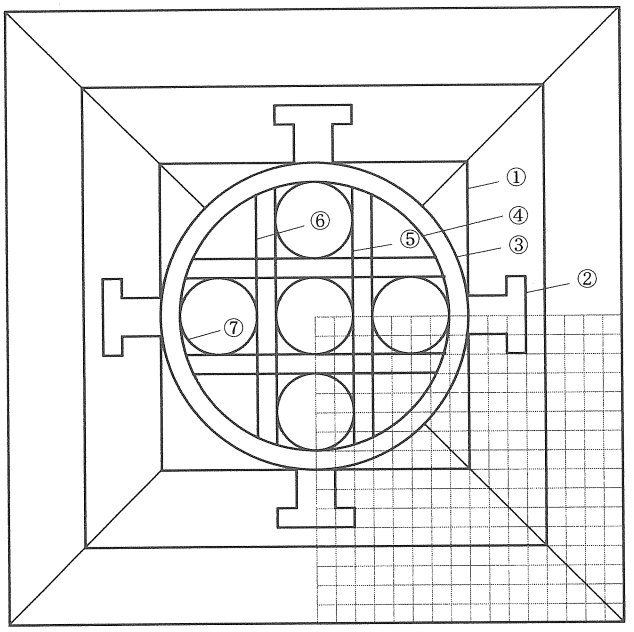

図15　金剛界マンダラ

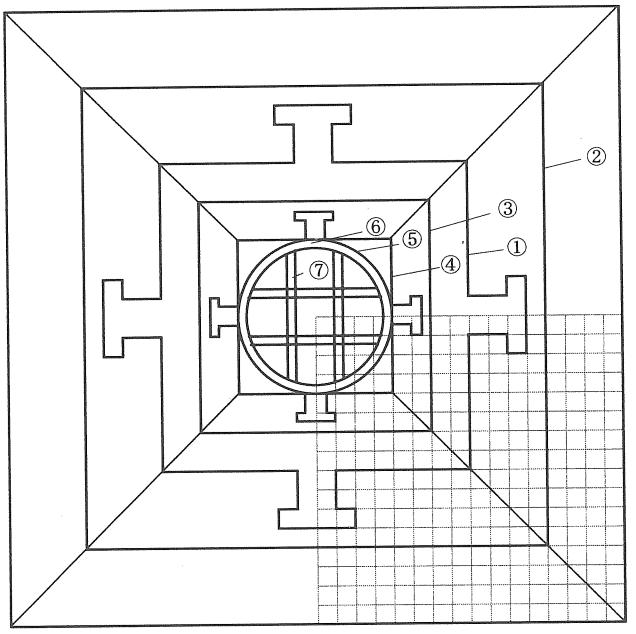

図16　文殊金剛マンダラ（43尊）

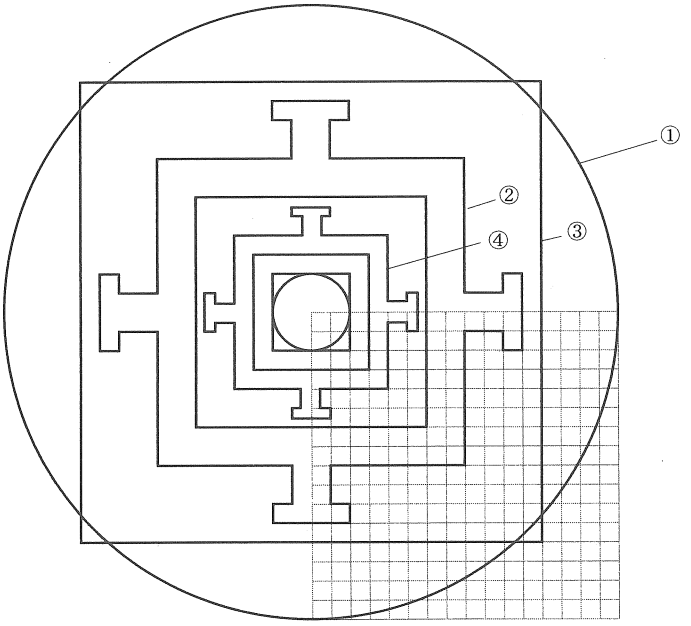

図17　　法界語自在マンダラ

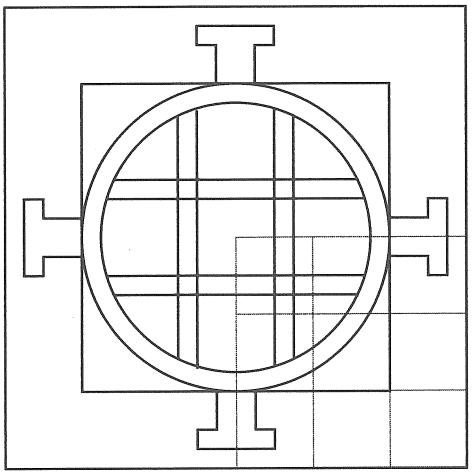

図18　　法界語自在マンダラ中心部

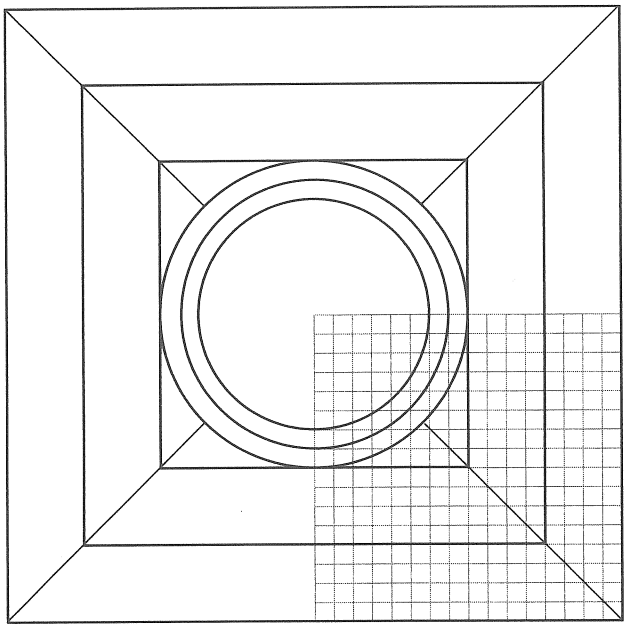

図19　悪趣清浄マンダラ

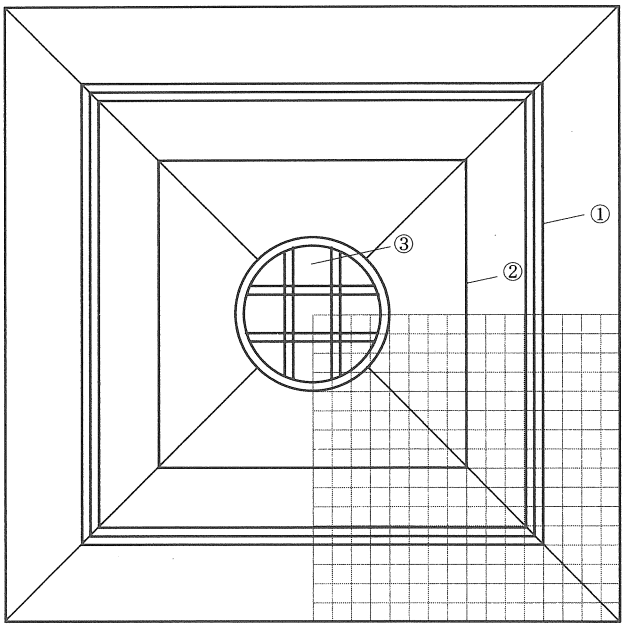

図20　ブーダダーママンダラ

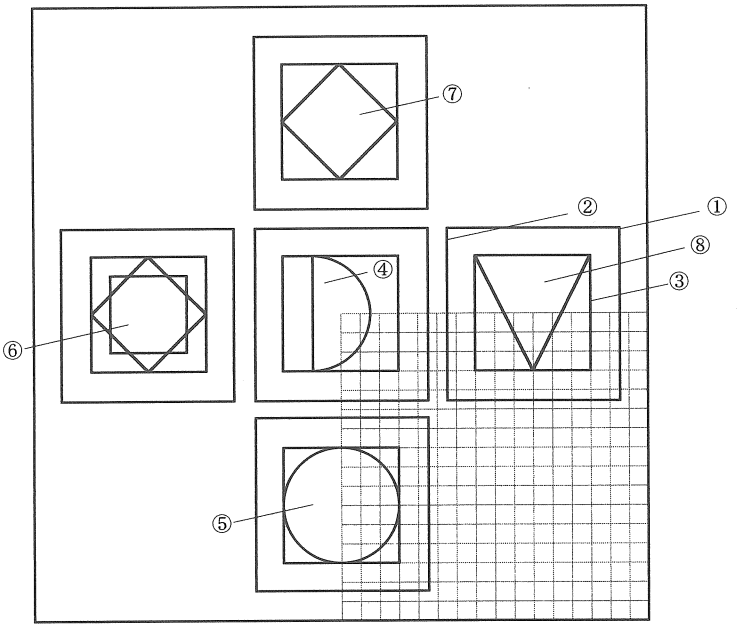

図21　　パンチャダーカマンダラ（小楼閣の門と外壁の中の線は省略）

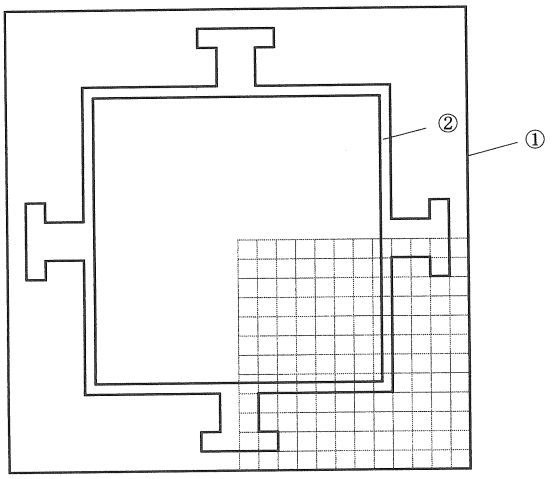

図22　　パンチャダーカマンダラの小楼閣（１目盛は小楼閣用の2マートラ）

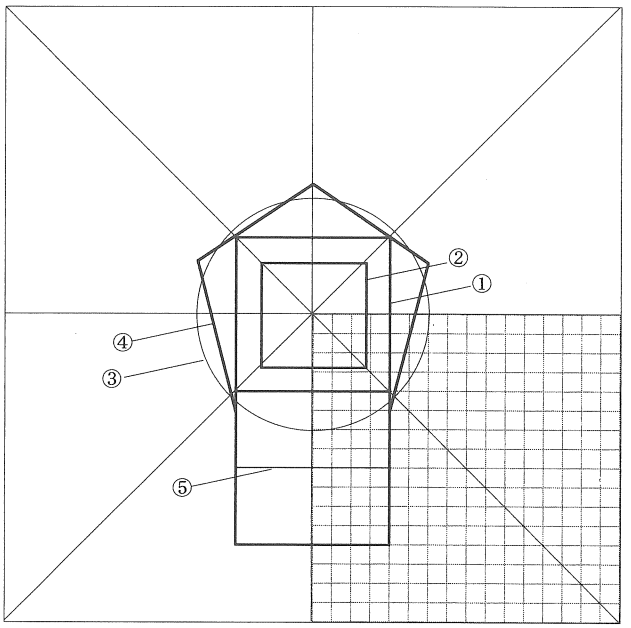

図23　六転輪王マンダラ（墨打ちの途中の段階）

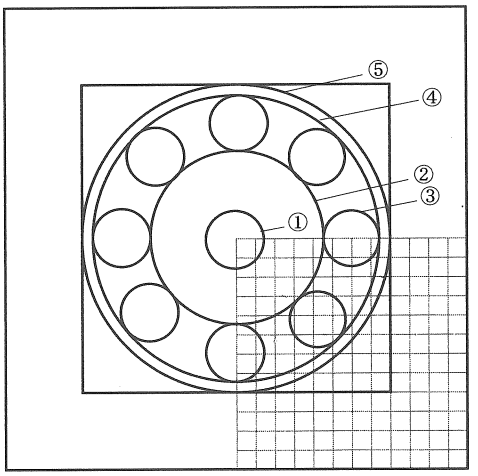

図24　六転輪王マンダラの小楼閣（1目盛は小楼閣用の2マートラ）

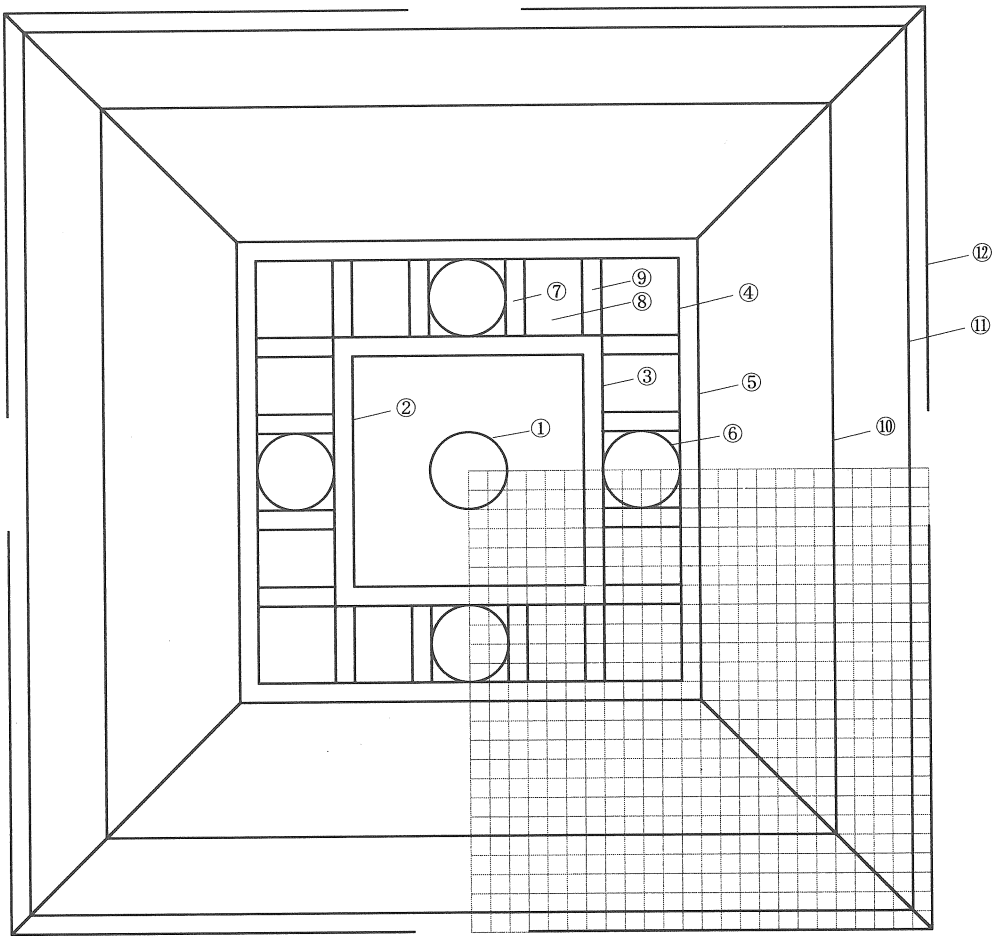

図25　　時輪マンダラの意密マンダラ（1目盛は2マートラ）

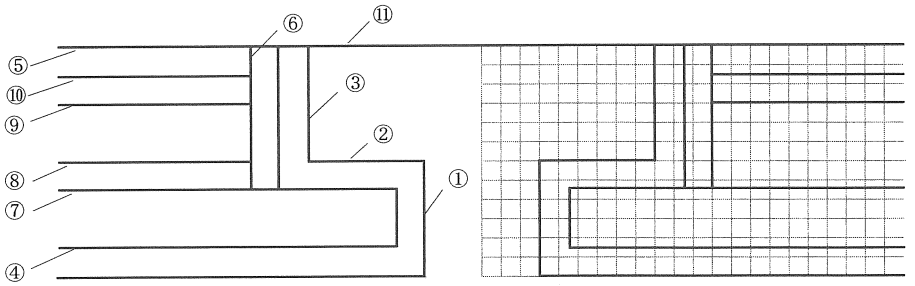

図26　意密マンダラの門の部分（1目盛は1マートラ）

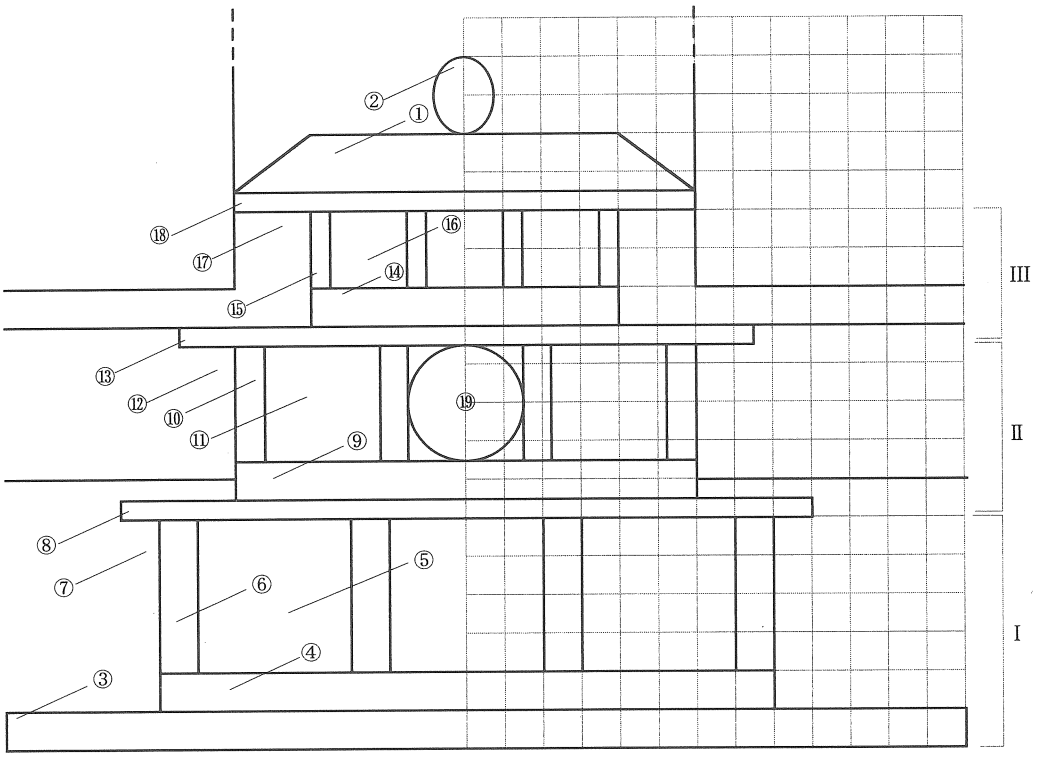

図27　意密マンダラのトーラナとその周囲（1目盛は1マートラ）

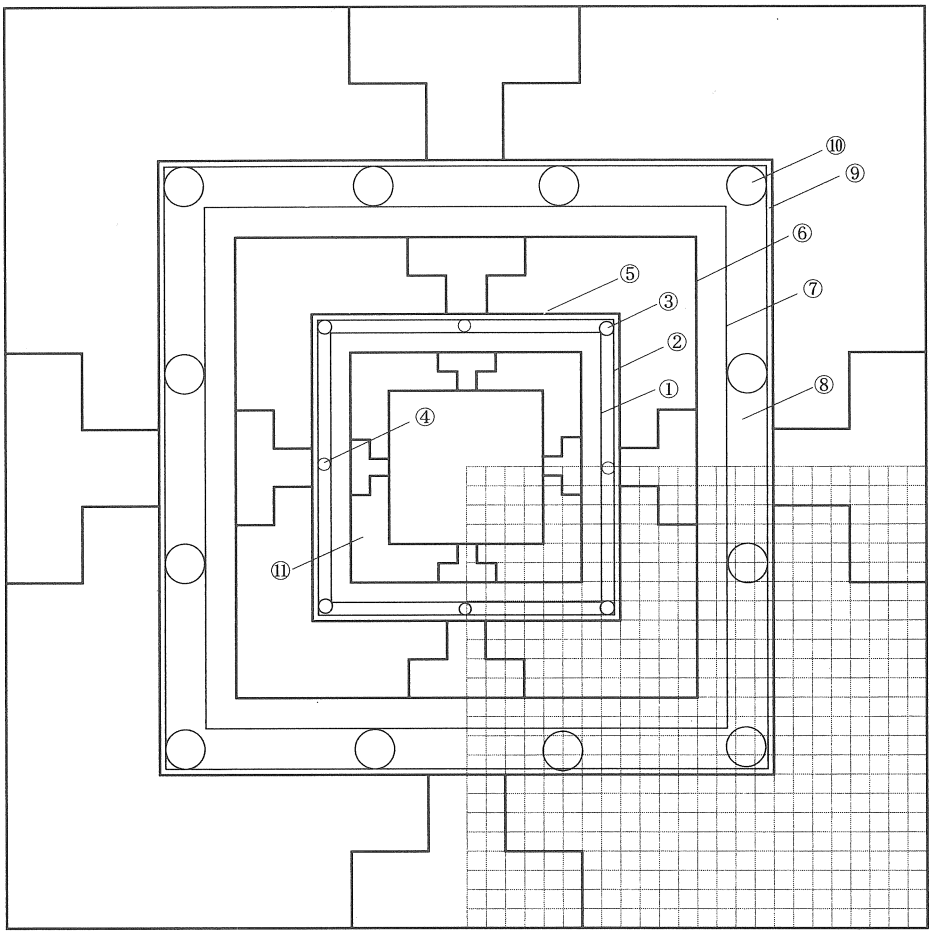

図28　時輪マンダラの身口意の三密のマンダラ（意密マンダラの内部、トーラナ、外壁の中の線は省略。1目盛は6マートラ）

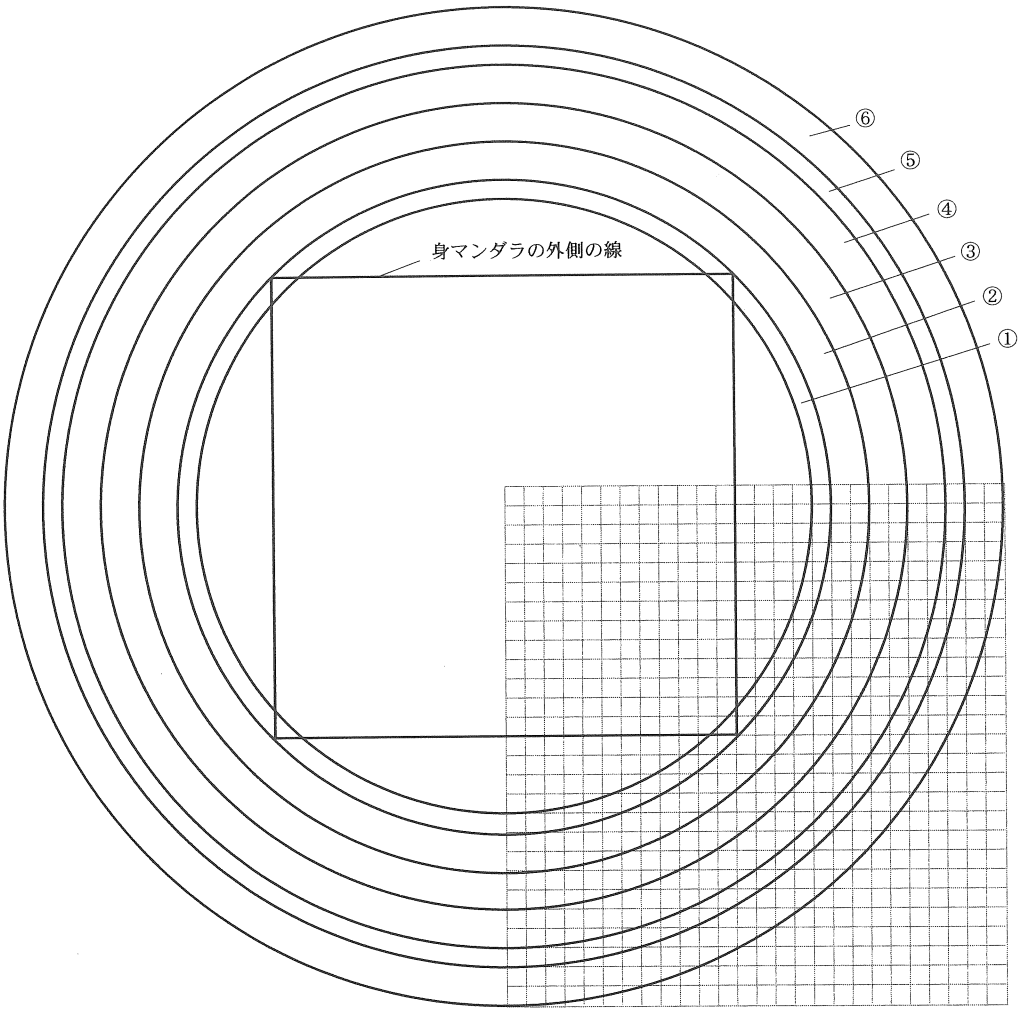

図29　時輪マンダラの外周部（1目盛は12マートラ）

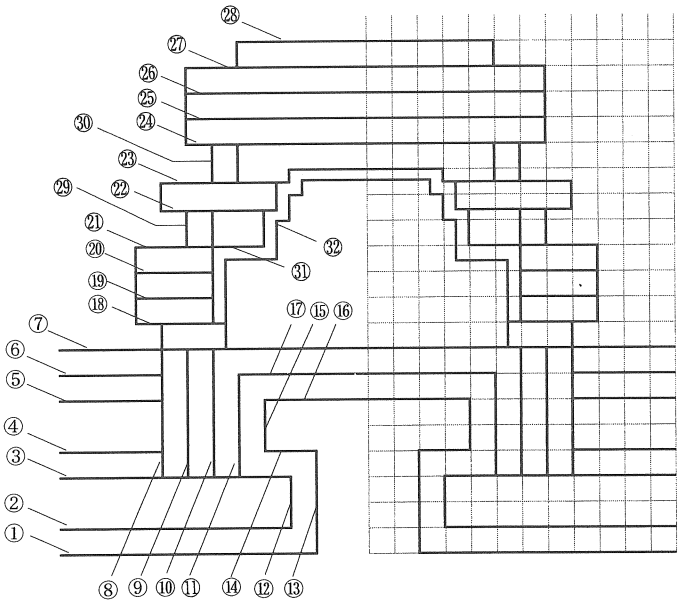

図30　　楼閣の門、外壁、トーラナ（第1のタイプ）

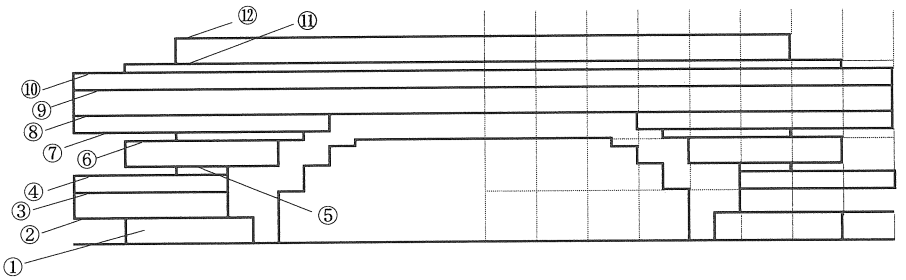

図31　　トーラナ（第3のタイプ）